

▼：改頁 ☆：未翻訳 □未校訂

さても夏女は上総の国司久影の下知に従い、彼の奉り文一封を箱に納め襟に掛けて都を指して急ぐ程に、元より得たる仙術の四つの甲馬を腿に繋いでちっとも怠らざりしかば、一日におよそ八九十里の道を行く事難くもあらず。さるにより次の日は早くも近江路まで来にけるに、頃は水無月の末なりければ暑さ一入耐え難し。ここらにしばし憩わずば霍亂を病む事もやあらん、涼しかるべき茶屋もがな酒屋もがなと見回すに、辺りにはさる家の無ければ、なお行くと行く程に、と見れば湖の辺の葦々繁き汀に添うた一棟の酒屋あり。これ究竟と立ち寄って草鞋を解き捨て、そのままに奥の方の小座敷の湖水を見渡す所に至って、裳裾を下ろして座を占めれば、此の家の小女郎が出迎えて、

「お客様は酒をや召されるか。飯を参らすべうもや」と問うを夏女は聞きながら、

「今日は暑さが耐え難ければ御膳は未だ欲しからず。あらん限り肴をものして、酒を飲ましてたもやいの」と云うに小女郎は心得て、厨へかくと云い継ぎけり。その時この家の女房と覚しき者が夏女の襟に掛けたりし状箱に眼を付けながら、さらぬ様にて居る程に、しばらくして女の童が持て出る酒肴をその女房が受け取って、夏女にすすめ口誼を述べて、客をそらさぬ愛想に夏女は何の心も付かず、やがて酒肴を引き寄せて、手酌に盛って飲まんとしたる油断を見澄ますその女房は早身を起し足を飛ばして夏女の脾腹をはたと蹴る。蹴られて夏女はしばしも得耐えず、「アツ」とばかりに仰け反って、そのままだうと倒れけり。只今夏女を蹴倒し打たる此の女房は別人ならず賊が砦の大將の暴磯神の朱西にて、ここはすなわち朱西が世の風聞を探らん為に久しく老舗し酒店なり。その時朱西は夏女の襟に掛けたりし彼の状箱を奪い取り、手早く封を押し開き、初めより終わりまで読み返しつづ驚いて、

「さては此の女飛脚は上総の国司久影より春雨の刀自の謀反の由を都へ注進する使いなり。要こそあらめ」と思案をしつつ、倒れ伏したる夏女の身の内をなおあちこちと改め見るに、腿には四つの甲馬を掛けたり。ここに至って朱西は更に又、思う様、

「上総の国につけられたる女韋駄天と聞こえしは日に八十里の道を走る仙術の妙を得て、腿に甲馬を掛けるとぞ。呉竹の刀自の物語りに予て聞いたる事あれば、察するに此の飛脚は女韋駄天夏女ならん。彼女は何故に春雨の大箱殿の謀反の由を告げる飛脚に立ちたるやらん。問わずば訳を知り難し」と分別既に定まりければ、手下の荒男らを呼び寄せて、事しかじかと説き示し、

「我今彼女に活を入れ、息吹き返させんと思うなり。皆々辺りに気を付けよ」と言葉忙しく心を得させて、夏女の辺りに立ち寄りつつ、その脇腹に手をかけて、柔の活を入れしかば、夏女はたちまち息吹き返して辺りを見れば、無惨やな大切なる状箱は主人の女に開かれて、彼女の手元にありければ、驚き怒って方辺に置きたる短刀をきらりと引き抜き、面も振らず朱西を斬らんとするを引き外す。此方も覚えの身のこなし、かい潜りかい潜りつつ拳をしっかりと取り止めて、

「逸りたまうな夏女の刀自。私は元より悪心無し。心を鎮めて云う由をまず聞きたまえ」と、騒がぬ魂に夏女はいよいよぶかつて、

「心得難きそなたの心底。大切なる注進状を奪い取られて、おめおめと此のまま上総へ歸られんや。しかるも我が名を知つたるは仔細あるべし。いかにぞや」と問われて朱西はにっこりうち笑み、

「事の元を告げざればその疑いは道理なり。私は賊が砦の小蝶の刀自の手下の大將朱西と呼ばれる者なり。世の風聞を探らん為此の所に店を開いて早年頃を経たるなり。しかるに御身の体たらくが遠国の領主より都へ火急の注進の飛脚ならんと察せしかば、油断をうかがい蹴倒して状を開いて見てけるに、大箱の刀自の謀反の由を都へ告げる此の文言。上総の国司久影が亀菊へ訴えの事の心は知られたり。しかるに御身が四つ甲馬を腿に繋ぎし体たらくは呉竹殿の物語りにて予てその名は隠れ無き夏女の刀自であるべしと思うによって、遂に殺さず活を入れ蘇らせて、事のここに及べるなり。大箱の刀自は何故に謀反の罪を得たまいたる。それを知りつつ使いに立ちたる御身の心底計り難かり。様子をつぶさに告げたまえ」と云うに夏女は又、驚いて、

「さては和女郎は江鎮泊の朱西殿でありしよの。春雨の刀自が囚らずも此上無き罪を得たまいたる始めを云えばしかじかなり、終わりは斯様斯様なり」とて房野出岬の酒樓にて良からぬ歌を詠みしより疑われたる事の趣を落ちも無く告げ知らせ、始め私は大箱殿を救わんとのみ思いつつ斯様斯様に謀りしかども、下総浜野の藪医師坂根一犬の為に見破られ、その謀り事は行われず、これにより大箱殿は矢庭に牢屋に繋がれて、逃れる由も無くなりぬ。しかるに国司久影殿は大箱の刀自の罪の虚実を定めかねたるにより、亀菊殿へ訴えて御判断に任せんに、汝は都へ馳せ上り、問わせたまえばしかじかとありつるままに申せよかしと云われしにより、いかで我は都に赴き、ともかくもして大箱の刀自を救わんと思ひ定めて来たるなり」と云うに朱西あざ笑い、

「そは御身が久影に欺かれたまいしなり。此の書状の文面では大箱の刀自は先頃、都の童歌に前表(前ぶれ)ありし逆賊の由は分明なりと記したるは紛れもあらず、これ見たまえ」とて指し示せば、夏女はやがてその状を見つつ、いよいよ当惑して、かかれば都へ上るとも大箱の刀自を救われる事にてはあらざりき。いかにすべき」とひそめて、問えば朱西頷いて、

「ここにて物を思わんより賤の砦へ赴いて、小蝶、呉竹の両刀自に談合をしたまえかし。さあさあ」と急がすにぞ、夏女はこの儀に従って、朱西と諸共に賤の砦へ赴きけり。

○かくて暴磯神朱西はまず端近く立ち出て、合図の鎬矢を射たりしかば、遙か向かいなる葦の内より二艘の早船が漕ぎ出でて、艫楫を操る雑兵らが此方の岸に漕ぎ寄せけり。その時朱西はしかじかと夏女の事の趣を雑兵らに心得させつ、「呉竹殿に急ぎ告げよ」とて一艘の船を走らせ、その後夏女を伴って残れる船にうち乗りつつ江鎮泊へ赴きけり。▼

さる程に呉竹は雑兵らの告げによって早く道まで出迎えて、やがて夏女に対面しつつ、互いの喜び大方ならず。まず此方へと先に立ち、衆議廳へ誘いしかば、小蝶、箸、桜戸、味鴨、二十余人の女武者らは残らずここにうち集い、共に夏女に対面しつつ酒宴を設けてもてなしけり。その時夏女は小蝶らに大箱の事の趣、久影の下知の事、坂根一犬の讒言の元末、力寿、下貝らの事までも、漏らさずこれを告げしかば、小蝶は更なり二十余人の勇婦ら全て聞きながら、或るいは驚き、或るいは怒り、大箱を救い取るべき手立ての談合まちまちなり。その時呉竹が進み出て、

「私は不才にはべれども、春雨の刀自を救い取るべき謀り事のはべるなり。その謀り事は別儀にあらず、都よりの返簡を違わぬ様にこしらえて、夏女殿にもたらし返し、「大箱は謀反人の張本、早く都へ参らすべし、都において罪に行い、首を河原に斬り掛ければ、彼の童歌も自然と止んで人皆安堵の思いを為すべし、しかじか」と記し違わせば、久影これを真として大箱殿を都へ送らん。その時数多の兵にてその道筋に下待ちしつつ、送りの奴どもを斬り散らして、刀自を奪って此の

とりで
皆へ伴わん事は手の暇入らず。これにましたる近道あらじ」と云うを小蝶は聞きながら、
「その謀り事は良しと云えども、もし彼の輩が道を変え、この近江路を過ぎらざれば、その伏勢も
甲斐無からん」と詰るを呉竹は押し返し、

「そは宣う事ながら、東海道まれ越路まれ、予ねてより三方四方へ忍びの者を遣わして、その道
筋を定かに知らば、いずれの道まれ嫌いはあらず。密かにそこへ出迎えて、かたの如くに謀らん事、
各々覚えの武芸にあり。何の障りのはべるべき」と云うに小蝶は頷いて、

「云われる趣は道理なり。さりながら彼の亀菊の手跡さえ印章さえよく似せずば、久影これを
疑って災いがそこに起こるべし」と云うを呉竹聞きながら、

「その儀も私に思案あり。世の風聞に伝え聞きしに、亀菊はその始め、歌い女でありし頃は悪筆で
はべりしを成り出しより、忍び忍びに大師様を習いしかば今では能書の聞こえあり。しかるに今大津
の宿に大和文字植梨と云う女の手書きあり。彼女は近頃までも院の御所の賜にて、女武者所の
右筆なりしが政治が公ならぬを疎ましく思ひしかば、身の暇をたまわって大津に退き弟子を取
り、手跡の指南をしばるが、大師様の能書にて亀菊の手風に違わず、似せる時はいずれをそれと
定め難しと人皆云えり。又、篆刻を良くする者は▼これも又、大津の宿に聖小刀彫妙と云う女あり。
彼女はしばしば亀菊の印章を彫りしとぞ、人の噂に隠れ無し。そもそもその二人の女は武芸にも疎
からず、志が同じければ互に行きかい、友として交わり浅からずと聞こえたり。かかれれば今より
夏女殿を大津の宿へ遣わして、斯様斯様に欺きすかして、此の所へ招き寄せ、似せ下知文を作らせ
れば事十二分に整うべし。この儀はいかに」と囁くにぞ、小蝶は更なり夏女らの勇婦ひとしく喜び
感じて「しかるべし」と答えけり。

これにより小蝶らは夏女に金をもたらし、まず大津へとて遣わすに、用意早くも調いしかば、
夏女は例の早走りにてその日植梨の宿所に赴き、すなわち対面して云いけるは

「私は長浜の者にはべり。此の度、竹生島の弁才天へ金石碑を建てんと欲す。よってしばらく御身
を雇って宿所へ伴い、その文を書いてもらわん為に来たれり。此はいささかなる潤筆※(料)なが
ら受け納めたまいね」と云いつつ懐をかかぐって、金三十両を贈りしかば植梨は深く喜び受け取
って、

「仰せの趣は心得はべり。幸い此の節手隙なれば御宿所へ参るべし。さりながら石碑は彫り手
の上手を選まざれば書体崩れて見苦しかるべし。誰にか彫らせたまわする」と問うに夏女は頷いて、

「その儀もいささか抜かり無し。此の度建てる石碑は不動石ではべるから、世の常なる石工など
にうち任すべき物にあらず。ここには彫妙と呼ばれたまう女の篆刻者ある由なれば、それをも宿所
へ招き寄せ、彫らせんと思ひはべり」と云うに植梨は喜んで、

「そは一段の事にはべり。彫妙は私の友にて宿所もここより遠からず。招き寄せはべらん、ま
ず静やかに語らせたまえ」と懇ろに慰めて、茶を煎じ、菓子すすめて、大方ならずもてなす折か
ら外の方に駒下駄の音からからと響かして折り戸開いて入り来る者あり。と見れば、彫妙なりけれ
ば、植梨は喜び方辺に招きつつ、事しかじかと告げ知らせ、やがて夏女を引き合わせれば夏女は又、
その由を頼み、三十金を贈りしかば、彫妙は喜び受け納めて植梨と諸共に長浜へ行かんと云う談合
とみに調いけり。

その時夏女は兩人にうち向かって、

「此の所より長浜へは十五六里にはべれども、船に乗って追い手が良くば一日にて至るべし。明日の未だきに船路より伴うべし」と語らうにぞ、兩人異議無くその意に任して、この夜は夏女を留めつつ、なお懇ろにもてなしけり。

※潤筆（じゅんぴつ）：《筆をぬらす意から》書や絵をかくこと。

○かくて夏女はその明けの朝に植梨、彫妙を伴って、湖水の方に立ち出て、船を雇って乗りけるに、折から順風なりければその日の七つの頃おいに長浜近く着きにけり。三人は船より立ち出て、長浜の方に行く程に夏女は二人を見返って、

「私はここより先へ走って、宿所の者に告げ知らせ。又、道に出て迎うべし。後より静かに来たまえ」と云いかけて走り去りしかば、植梨と彫妙はこの儀に▼任せ、只二人行く事およそ七八町、波松原を過ぎる折からたちまち道の傍らより一手の兵が現れ出て、真っ先に進む女武者はこれすなわち別人ならず、賤の砦に名もしるき天津風真弓なり。その時真弓は声を振り立て、

「ここに来ぬる二人の女、我れ汝らに要用あり。命惜しくば縛めの縄に掛かれ」と呼び張って、遮り止めんと競いかかれば、植梨、彫妙は驚きながら逃れ難しと思うになん。この時世上の風俗にて女も旅には腰に離さぬ短刀ひとしく引き抜いて、

「命知らずの山立ち（山賊）ども、相手が違うぞ、覚悟をせよ」と罵りながら立ち向かい、兩人ひとしく斬ってかかれば真弓はわざと打ち負けて、走るをやらじと植梨、彫妙は一町余り追う程に、木立深き所より現れいづる一手の大將、これ瀨那槍の腐鷄なり。早兩人を遮り止めて、まっしぐらに駆けんとすれば真弓も早く取って返して、ひしひしと取り巻きつつ双方ひとしく攻めつけ攻めつけ、息をも付かせずもんだりければ、植梨と彫妙は多勢の中に取り込められて、遂に虜になりけり。

されば腐鷄、真弓らはその両婦人を引き立てて、賤の砦へ帰り来て、早衆議廳へ引き据えければ、小蝶は呉竹、夏女らと諸共に立ち出て、手づから植梨、彫妙の縛めの縄を解き捨てて、座席に誘い慰めて、

「私は火急の事により密かに御身二方に頼みたき由あって、謀っておびき寄せしなり。その故は斯様斯様」と大箱を救わん為に亀菊の似せ下知文を作り成さんと欲する事の始め終わりを説き示し、

「彼の春雨の大箱は世に並び無き賢女なるに、無実の罪にあたら命を失なわせんは痛ましからずや。只これのみにあらずして三世姫は鎌倉の將軍の正統なり。今より一味合体して春雨の刀自を救い取り、三世姫に仕えまつりて共に忠義を尽くしたまえ」と道理せめてすすめるにぞ、植梨と彫妙は欺かれしを初めて知って後悔すれどもその甲斐無ければ、困じ果てつつ、さて云う様、

「御頼みの趣は心得てはべれども、この事後日に現れれば祟りは眷属に及ぶべし。彫妙は叔母もはべるなり」と云うを小蝶は聞きながら、

「その儀は心安かるべし。私が予て計らって数多の人を大津へ遣わし、御身たち二人の眷属、家財を取って来よと云い付けたれば、やがて吉左右（相）あるべし」と云い慰めてもてなす程に、果たしてその雑兵らは植梨、彫妙の眷属、家財を船にうち乗せ帰り来にけり。さればこの両婦人は夫も▼あらず子も無けれども、今眷属をこの所へ取り来たられしに安堵して、兩人共に心を傾け、三世姫に仕えんとここに思案を定めつつ、再び否む気色も無く、呉竹が好む文言に植梨は筆を取り、典侍の女武者所の別当、亀菊の下知文を書きしたため、彫妙は又、亀菊の印章を篆刻するに、予て手

掛けし事なればちつとも違^{たが}わず彫り成したり。

事既に調いければ、小蝶、呉竹、夏女の勇婦ら、皆々感心したるその喜びは大方ならず、夏女はこれを受け取って、旅状箱に納め襟に掛けて元の如くに仕度しつ、小蝶、呉竹らに別れを告げて東を指して急ぐにぞ、小蝶、呉竹、その余の勇婦も忠義坂まで見送って、遂に袂を分かちけり。

○されば又、小蝶らはその夜に酒宴を催して植梨、彫妙をもてなしつつ、大箱、夏女らの噂をして、こうたくる☆までありけるに、呉竹は俄かに声を発して、

「あな抜かりにけり。仕損じたり」と云うに皆々驚いて、まずその故を尋ねれば呉竹答えて、

「然ればとよ。夏女にもたらし遣わしたる彼の下知文に仕損じあり」と云うに植梨、彫妙は諸共にいぶかって、

「私^{わらわ}が書きたる文言に違^{もんごん}いし所がはべりしか」、「私^{わらわ}が彫りたる印章に違^{いんしょう}いし事のはべるにや」と問えば呉竹は頭を振って、

「否、文言にも印章にもいささかも落ちはず。只これ私の過ちにて、大箱の刀自を救わんと謀りし事は仇となって、返って彼の下知文故に大箱、夏女の両刀自を殺されん事疑い無し」とひたすら悔やんで止まざりしを小蝶らはいよいよいぶかって、皆その故を尋ねれば呉竹答えて、

「然ればとよ。先に似せたる印章は椋橋亀菊と云う四文字なり。再び思うにその印は彼の婦人が未だ官位進まず典侍の局ならざる時に用いたる物、すなわちこれなり。今は官位が進みしに、古き印は用ゆべからず。且つ上総の新司久影は亀菊の従兄弟なれども、彼の婦人の養子となえて親子の如くものすと聞けり。しからば下知文たりと云うとも、その諱(実名)ある印章を押して遣わすべくもあらず、先には事の忙わしくてここに心の付かざりしは只これ私が誤りなり。

久影がその印章の異なるを怪しまば夏女の刀自も逃れる道無く、大箱の刀自と諸共に遂に頭を刎られん。さて仕損じたり」と呟きつつうち嘆き詮術も無く見えしかば、小蝶を始めありとある勇婦らは色を失い皆呆れたるばかりなり。

その時小蝶は呉竹にうち向かって、

「千慮の一失、今更に悔やんで返るべくもあらぬが、今より人を走らせて夏女の刀自を追わんとするとも、彼の婦人は一日に八十里を行く仙術あれば及ぶべくもあらず。さればとて手を束ねて、かくてあるべき事にもあらず。いざや上総へ赴いて▼彼の兩人を救うべし」と云うに呉竹は頷いて、

「その儀は最もしかるべし。さりながら事を露わになす時はその機を敵に悟られて、近づかん事叶うべからず。大将分は一五六人、屈強なる兵二百人余りを選んで、姿をやつし道を急ぎ、期に望み不意に起こって斬ってかからば万に一つも仕損じる事あるべからず。さあさあ用意をしたまえ」と言葉せわしくすすめるにぞ、小蝶はこの儀に従って、その夜俄かに手配りしつつ、蕃、桜戸ら五六人の大将を留めて砦を守らせ、その身は呉竹ら以下の勇婦十四五人と諸共に雑兵二百人を従えて、姿をやつし手分けを定め上総を指して急ぎけり。

○さる程に夏女は江鎮泊をいでしよりしきりに道を急ぎしかば、僅かに二日ばかりにして上総の国の市原の郡の飯山の城に帰り来て、すなわちその偽返簡を国司久影に参らせしかば、久影は受け取り開き見るに、亀菊の自筆にて、

「此の度注進の大箱は童歌に相叶う謀反人の事なれば、辺鄙にて殺すべからず。早く都へ参らすべし。しかじか」とありければ久影は領き巻き納め、いか様にも一方ならぬ逆賊なれば都にて罪におこなわんと下知せられしはさもあるべき事なりかし。かく速やかに埒明きしは單に汝が功なりとて、夏女を厚くねぎらって褒美の金を取らせけり。

傾城水滸伝 第九編ノ二 曲亭馬琴著 歌川国安画

かくて上総の新司久影は大箱を都へ上すべきその用意を為す程に、ある日又、彼の坂根一犬が残り暑さの見舞いととなえて、浜野の里より来にければ、久影すなわち呼び入れて対面し、去ぬる日夏女が都より帰り来る由を告げ知らせ、典侍殿(龜菊)より懇ろなる返し文をたまわって、

「大箱は童歌の前表に符合せし謀反人の事なれば、そのまま都へ送るべし。ここにて罪に行なえば、民の心も安堵して、悪しき風聞も止むべきなり」と仰せ下されたるにより、都へ送り参らすべき用意只今、最中なり。ついて和殿の願いの事も、遠からず内奏すべしと、仰せ越されたりければ、近き程に吉相あらん。我らも喜び思うにこそ」と云うに一犬は膝を進めて、

「そはありがたき事にこそ候え。さりながら拙者などの願事をかく速やかに受け引きたまいて、御返し文に書き添えられしは余りの首尾にて分に過ぎたり。はばかりながら御座興ならん」と答えて真にせがりしかば、久影は微笑んで、

「いかでか和殿を欺くべき。これ見よかし」とその状を取り出して示せしを一犬はうち戴き、押し開きつつ、とくと見て、

「この御印章の篆文は椋橋龜菊と云う四文字なり。都よりの御下知文にこの印をのみ押したまうや」と問えば久影は頭をうち振り、

「否、これまでの下知文に用いられしは此の印ならず。いかなる故にか此の度は印章を変えられたり」と云うに一犬は声を潜めて、

「さては此の御下知文は偽筆なる事疑い無し」と云うを久影いぶかって、まずその故を尋ねれば、一犬答えてさん候、

「此の印章は彼の君が初めに用いたまいし物なり。今は司が進みたまうに、何時までもかく元の御印を用いたまうべくもあらず。且つ、殿と彼の君は従兄弟だちにて御座すれども、内々にては親と子の契約を為したまいしにあらずや。例え御下知文▼なりとて、親としてその子の元へ遣わしたまう返し文に諱(実名)ある印章を用いたまうべくもあらず。これらをもって押す時は偽筆なる事疑い無し。察するに彼の夏女は江鎮泊の賊婦らと示し合わせし事あって、大箱を都へ上らせて、道にて奪い取らせんと謀りたる者なるべし。早く夏女を呼び寄せて、都の様子を問いたまえ。彼女が実に都へ上って帰り来たる者ならば、つまびらかに答え申さん。又、都へは行かずして、江鎮泊より帰り来たらば、その答えは胡乱(疑惑)なるべし。さあさあ」とすすめしかば、久影はしきりに領いて、

「云われる趣、さもあるべし。夏女はこれまで上京せず、此の度初めて上りしに、都まで行かて返らば答え分明なるべからず。これにましたる詮索の近道無し」

と喜んで、手底鳴らして、近侍の者に夏女を呼べとて急がしけり。

○されば又、夏女は上総へ帰りし頃、牢屋に行つて大箱に賤の砦の事の趣、呉竹の謀り事の一部始終を囁き告げて、

「事かくの如くなれば、都へ上る道中にて奪い取られん事近きにあらん。その日を密かに待ちたまえ」と云うに大箱喜んで、いと頼もしく思いけり。さる程に夏女はこの日宿所に居り、力寿と二人差し向かいにて酒うち飲みて居たりしに、たちまち国司の召されるとて、直使いが来にければ手早く衣装を改めて、使いと共に参りしかば、久影がやがて立ち出て、

「召し寄せし事、余の儀にあらず。その方は先に上京せし折りに、院の御所は何れの方、何れの御門より入りたるぞ」と問われて、夏女はちつとも騒がず、

「私が御所へ参りしは黄昏頃ではべりしに、御返し文を受け取りしも、又、夕暮れの事なりければ、何れの御門と云う事を得わきまえずはべりき」と云うに久影はあざ笑い、

「しからばその折りの取次ぎは男なりしか女房なるか。年はいくつばかりなりしぞ、名は何と云いたるぞ」と問うに夏女はうち案じ、

「取次ぎ人は女にて、四十余りに見えはべりしが、その名は聞かずはべりし」と云わせも果てず久影は怒れる声を振り立てて、

「此の奴、はなはだ大胆なり。典侍の局に仕われる男女の官人多かれども、取次ぎは皆男の役にて女が出る事は無し。使いが女なる故に女をもつて返し文を渡される事ありとも、これ又、老女の役にあらず。思うに汝は都へ行かず、人を語らい偽筆の下知文をもて我を欺く、巧みはここに現れたり。し奴縛めよ」と激しき下知に屏風の後ろに退き居たる一犬を始めとして、若侍らがアツと答えて、おらおらと走り出て、夏女を厳しく縛めて、鞭を上げて続け様に幾つとも無く打ちしかば、夏女は遂に苦痛に耐えず、心ならずも白状する様、

「私が都へ赴きし折に湖水の辺を過ぎりしに、賤の砦の勇婦らに生け捕られ、砦へ引かれて、御書をさえ奪い取られ、彼の偽文を書き換えて、「これをもて上総へ帰れ。否と云えば許さじ」と云われるに栓術無く、一旦の罪を逃れん為にその儀を深く押し隠し、欺き奉りてこそはべるなれ」と白状に及びしかども、江鎮泊の賊婦らと示し合わせしなるべしとて、なお幾度も責めけるに、云う事始めの如くなれば、厳しく牢屋に繋がせけり。

○かくて新司久影は坂根一犬をねぎらつて、▼「和殿の智略、今に始めず、夏女の悪事を見出したる、その功績は比類無し。折をもつてこの由を都へ聞こえ上げるべきなり」と云うに一犬は喜んで、

「それがしは此の年頃、殿の御鼻肩によって、領地も少なからず数多の眷属を養ひ候へば、只その御恩を報ぜん為に心付きたる事あれば申すまでにて候に。分に過ぎたる御賞美は時の面目此の上無し。ついて大箱、夏女らは只速やかに頭を刎て、その後都へ聞こえ上げたまえ。もし長詮議に日を送らば、江鎮泊の賊婦らが奪い取らんと計るらめ。急がせたまえ」とすすめしかば久影この儀に従つて、下司らに下知しつ、その用意を急がせるに、下司らは大箱と夏女を哀れむ者が多かるに、此の時は早夏過ぎて文月十三日なりければ、皆々ひとしく申す様、

「大箱、夏女を刑罰の事承り候へども、明日よりして十六日まで盂蘭盆に候へば、この三日は緩

べたまいて、十七日に為されれば、しかるべし」と云うにより、久影は「^{ひさかげ}「^げ実にも」とその儀に任して十七日にぞ定めける。この時小蝶らは大箱を救わん為に^{しず}賤の^{とりで}砦をいでしより、しきりに道を急ぎしかども、な^{どうちゅう}お道中に在りければ、もし十四日に大箱らが斬られる事があらんには救うに由も無かりしを^{しんめいぶつだ}神明仏陀が^{ぎふれつじょ}義婦烈女を哀れみたまうものにやありけん。下^{しもつかさ}司らがしかじかと^{いさ}諫めしによって、日を延ばされたる^{めいうん}命運の程ぞ、^{きどく}奇特なる。

○さる程に七月十七日になりしかば、大箱、^{なつめ}夏女を罪なさんとて、城外に引き出すに、警護の^{ざっぴょう}雑兵百人余り、前後左右を取り囲み、既に▼^{ひさかげ}斬り場へ引き据えれば、久影も^{じっけん}実見の為、士卒を引き連れ城を出て、設けの^{しょうぎ}床机に掛かりたり。これを見んとてあちこちより、^{あまた}里人数多集いたるが、中に^{からひつ}唐櫃多く担がせて、此方を指して来る者あり。雑兵らはこれを見て、「かかる^{からひつ}群集のただ中へ、唐櫃はかき入れ難し。さあ^{ひさかげ}脇道へもて行きね」と諸声たてて制すれども、唐櫃かきは^{いらだ}聞かぬ振りして、早近々とかき据えたり。これにぞ時の移りしかば、久影しきりに^{げち}苛立って、さあさあと下知すれば、^{ざっぴょう}雑兵^{なつめ}両人大箱と夏女が後ろへ立ち廻り、左右ひとしく^{こうべ}刀を抜いて頭を討たんとする折から、たちまち群集の内よりして一人の大女、ヲツとおめいて走り出て、左右にひ提げし^{おの}斧をもて、その斬り手の^{ざっぴょう}雑兵を真つ向肩先^{からたけわ}嫌い無く、唐竹割りにぞ切り倒す。此の大女は別人ならず^{つむじかせ}旋風の力^{りきじゅ}なり。思い掛け無き^{ろうぜき}狼藉なるに、誰か^{のし}驚き騒がざるべき、あれよあれよとばかりに^{もんちやく}罵りどよめきて悶着す。かかる所に群集の内より^{とき}関を上げ、^{えもの}得物(武器)をうち振り、東の方より小蝶、^{はなまと}花的、^{ふたあみ}二網、^{いつつい}五井、^{ななわた}七曲、^{そまき}杉木、^{もみじば}真弓、^{せきちく}黄葉、西の方より石竹、^{くだかけ}腐鶏、^{めきぎす}雌雉、^{つつどり}筒鳥、^{うすきぬ}薄衣、^{えりたえ}彫妙、^{うえなし}植梨、^{つばくらめ}燕が^{おもて}面も振らず斬ってかかれば、その手の^{ざっぴょう}雑兵二百人、彼の^か唐櫃をうち開き、手に手に打ち物取り出して、押し続きてぞ攻めたつる。なかにも^{おの}力寿は斧をもて、またたく^{ひま}隙に十四五人を斬り倒し斬り倒し、尚も進んで斬り立つる。

小蝶は遙かにこれを見て、

「あれは^{なつめ}夏女の^{つむじかせりきじゅ}噂に聞いたる^{ほとり}旋風力寿ならん」と云いつつ^{ほとり}辺へ近づいて、

「^{あっぱ}天晴れ、^{ゆうふ}勇婦の働きかな。名乗りたまえ」と呼ばはれども、^{あまた}力寿は耳にもかけずして、いよいよ^{ゆうふ}勇み進みけり。この^{たちかせ}勇婦らが^{あまた}太刀風に^{ひさかげ}数多の城兵斬りたてられて、皆散り散りになりしかば、久影も馬を引き寄せ、乗るより早く捨て鞭当てて、城中指してぞ逃げたりける。

○かくて^{こうちんはく}江鎮泊の^{ゆうふ}勇婦らは大箱、^{なつめ}夏女の^{いまし}縛めの^{しりぞ}繩を手早く斬り捨てて、助け引きつつ退いて、^{おもむ}決手の方に^{すのさき}赴く程に^{やしろ}洲崎の社がありしかば人々ここにうち集い、しばらく息を付きにけり。大箱、夏女はこの時に小蝶らの人々に計らざる^{なつめ}助けを得て、再び^{いまし}生きてる^{しりぞ}喜びをひとしく述べて止まざりければ、小蝶らは又、^{にせげちぶみ}呉竹が^{いんしょう}偽^{しそん}下知文の^{わざわ}印章を仕損じたるにより、^{わざわ}災いあらん事を恐れて、^{めどぎ}呉竹、^{あじかも}箸、^{はだな}桜戸▼、^{あかにし}味鴨、^{しろこ}秦名、^{とりで}朱西、^{ゆうふ}白粉らを^{ゆうふ}残し留めて、共に^と砦をうち守らせ、その余の^{ゆうふ}勇婦は二百人の^{ざっぴょう}雑兵を従えてこの地へ来る事の^{おもむき}趣を^{かよう}斯様斯様と^{あつ}告げ知らせ、^{あつ}篤くいたわり^{あつ}慰めけり。かか

りし程に^{ひさかげ}力寿も又、久影を^と追い捨てて、この所へ来にければ、小蝶ら全て^と対面して事の由を説き示し、「^{わによろ}和女郎の今日の働きはその^{あねご}功第一なりけり」とて、ひたすらこれを^か誉めしかば、^{あつ}力寿は深く喜んで、

「^{わらわ}私はかくと知らざりしかども、二人の^{あねご}姉御をおめおめと^か縛り首を打たせはせじ。期に望んで彼の^か奴どもを一人も残さず^{かくご}斬り散らして救い得ずば、諸共に死なんと^{あつ}覚悟を極めしに、云い合わさねど、

人々の心に助けを得たりしは思い掛け無き幸いななり」と云うに、小蝶もその余の者も彼女の勇気の
遅しさをいよいよ感じて止まざりけり。

かかる折から沖の方より人数多乗りたる船が三四艘此方を指して来にければ、人皆驚き怪しんで
敵か味方かとばかりに、由を知るべくもあらざれば、二網は衣脱ぎ捨て、海へぞんぶと飛び入って、
漕ぎ来る船に近付いて、見定めて帰り来て、「彼の船の内なるは女の多く乗ったるなり」と告げる言
葉も終わらぬ程に、早漕ぎ寄せるその船。その一艘には下貝、横鯛、日熊、龍間が乗りたるなり。
又、一艘には琴樋、枸橘、千垣らがうち乗りつ、又、一艘には末広、河堀が里の若人を従えて、ひ
としくここに乗り付けつつ、洲崎の社に大箱と夏女が居るを見て深く喜び、やがて汀へ船を繋い
で、その辺にぞ集いける。

その中に下貝は大箱、夏女にうち向かって、

「私は御身二方を救い取らんと欲せしかども、身一つにてはその事叶わず。よって隅田川原へ赴
いて姉横鯛と談合しつつ、末広姉妹、琴樋、日熊、龍間の姉妹、枸橘、千垣に由を告げ、里人さへ
に従えて、各々船にうち乗って、只今この浦へ寄する程に、遙かに見れば此の社に人多く集いたる
その中に御身二人が御座するに、心落ち居て、皆諸共に参りき」と云うに大箱、夏女らは大方なら
ず喜んで、凶らずも小蝶らに救われたる事の趣を告げ知らせつつ引き合わせれば、互いにその名
は聞き及びたる勇婦勇婦の初対面、つつが無きをぞ祝しける。かかる所に討手の兵、一千余り
寄せ近付く貝鐘の音が聞こえしかば、力寿は早く立ち上がり、此のままにて退き去らんは残り惜し
く思いしに、押し寄せ来る討手の奴ども、「面白し、面白し。皆殺しにしてくれんず」と▼二つの
斧をうち振って、まっしぐらに馳せ向かえば、只今集いし新手の勇婦らも皆遅れじと力寿を助けて、
多勢の敵を斬りたて突き伏せ、さしも激しき太刀風に討手の士卒ら辟易して、皆蜘蛛の子を散ら
すが如く、ようやく城へ逃げ籠もり、門戸を閉じて再びいはず。力寿らは思いのままに罵りつ恥か
しめて、静かに引いて帰りしかば、小蝶、大箱らはこれをねぎらい、「まず武蔵まで退かん」とて、
皆々大船幾艘にかうち乗りつつ、山谷村に赴いて、末広、河堀の宿所に来にければ、主人木工六は
喜んで酒宴を設けてもてなしけり。

その時大箱は諸人にうち向かって、

「皆様何とか思いたまう。久影はとまれかくまれ、憎むべきは一犬なり。千葉の浜野へ押し寄せて、
恨みを返さんと思いはべり」と云うを小蝶は押し止めて、

「その恨みは道理ながら、彼の一犬が居る浜野の里には領主千葉之介の出丸あり、軍兵多く籠も
ると聞くにき。我々彼処へ押し寄せれば、その軍兵が見てはおらん。もし合戦に及べば、味方小勢
にして疲れたり。勝ちを取る事難かるべし。一トまず近江へ立ち帰り、重ねて大軍をもて討ち取る
べし。この儀に従いたまいね」とまめやかに止めるを大箱は押し返し、

「近江と下総は道遠かり。此の度彼奴を討ち取らずば、重ねて来ん事容易からず。彼処の案内を知
りたる者、この内にはあらずや」と問いつつ席上を見渡せば、大和文字植梨が進み出て、

「私は先に千葉に至って逗留せし事あるにより、案内はほぼ知りはべり。今より彼処へ忍び行っ
て見て参らん」と容易く受け引き、彼の地を指して赴きしが、その次の日只一人の女を伴って帰り
来て、さて大箱らに告げる様、

「これは私の友達にて、縫い針の技を良くしはべるにより、人あだ名して傭鍼抜糸と呼びなした
り。此の頃一犬の宿所へ雇われて、衣を縫ってはべりしかば、私が彼処へ赴いて一犬の宿所を

うかがう程に、囚らずも抜糸は仕事をし果てて帰ると、彼の家よりいづるに逢いにき。よって、その秘め事をしかじかと囁き示し、伴って帰り来たれり。一犬の宿所は更なり、浜野の出丸の事までも、此の抜糸は知らざる事無し。問わせたまえば分明ならん」と云うに抜糸は進み寄り、大箱、小蝶らにしかじかと、彼処の案内を手取る如く、事つまびらかに告げしかば、大箱が喜び云うも更なり、小蝶もその余の勇婦らも皆▼勇まざる者も無く、かかる便宜を得たるから、ちっとも猶予すべからず。今宵彼処へ忍び入り一犬を討ち取らんとて、早く手分けを定めつつ、再び船にうち乗って、千葉の浜野へ赴きしが、二網姉妹、下貝、琴樋、横鯛らをば、そのまま船に残し置き、もし一犬が船に乗って逃げ去る事もあるならば、生け捕るべしと手配りしつ、この余の者は陸に上って、その夜一犬の宿所に忍び近付きけり。

これより先に抜糸は案内知ったる事なれば、一犬の背戸の方の垣を越え忍び入って、内より木戸を開けしかば、皆々忍び入る程に手水に置いたる一人の下部が此の有様に驚いて声を立てんとする所を花的すかさず走り掛かって抜く手も見せず、その下部の細首、丁と打ち落とせば、アツとも云わず消し飛んで軀は後に倒れけり。かくて小蝶、大箱らは裏表より忍び入り、前後ひとしく火を放ち闘をどっと上げしかば、一犬の家の内なる人は皆驚き起き出して門の戸開けて出んとするを待ち設けたる勇婦らは煙りの内より斬って入り、切つ先鋭く難立つればいよいよ驚く家内の者ども、「すはや、夜討ちが入りたるぞ」とて逃げんとしつ度々を失って、討たれる者ぞ多かりける。

さる程に里人らは一犬の宿所の方に火の起こりしを見て、驚き騒ぎ、水桶、梯子をかき担い、皆遅れじと馳せ集う。その時前後の門を守り居たりし江鎮泊の勇卒らは里人を遮り止めて、▼

「人々逸って近づくべからず。これは坂根一犬に恨みある大箱の刀自並びに賤の砦の勇婦らが焼き討ちをしたるなり。しかれども、善人をば一人も討つ事無し。速やかに退いて、これらの由を千葉の出丸へしかじかと注進せよ。千葉殿には恨みも無ければ此方より寄せる事無し。さるを城より討っていでれば手並みの程を知らすべし。これ我々が云うにあらず。小蝶、大箱の両刀自が予て云い付け置かれしなり。早くこの儀を出丸へ伝えよ。異議に及ばば生きては返さじ。命惜しくば、さあ行きね」と言葉せわしく諭すにぞ、里人らは驚き恐れて、只「アイアイ」と答えをしつつ、そのままに皆退いて千葉の出丸へしかじかと由を注進してければ、出丸の大將は驚いて、

「実にその勇婦らは音に聞こえし者どもなり。勢の多少も計り難きになまじいに討っていでれば、毛を吹いて傷を求める、後悔無しと云い難し。只この出丸を取られぬ様に用心するにます事あらじ」と思案をしつつ、下知を伝えて固く守っていでざりけり。これにより小蝶、大箱の勇婦らは思いのままに一犬の家内の者を皆殺しにして、その死骸を改め見るに主人一犬が無かりしかば、残り惜しく思うのみ。家さえ焼き失なれば、外に隠れる隈も無し。当の仇たる一犬を討ち漏らせしこそ残念なれ。今はしもこれまでなり。夜の明けぬ間に退かんとて笛を鳴らして人数を集め、静かに浜辺まで立ち帰るに、二網、五井、七曲、日熊、龍間の姉妹は船に残ってここに居り、一犬を討ち漏らしたる由を聞いて恨めども、さてあるべきにあらざれば皆々うち乗る船と共に武蔵の山谷村へ帰りけり。

○さる程に横鯛、下貝、琴樋らが乗ったる船は遠見の為に沖中にあり。既に暁の頃に至って、上総の方より此方を指して乗り走らせる早船あり。是すなわち一犬なり。さても坂根一犬はこの日飯山に

おもむ ひさかげ ほどり お
赴いて久影の辺に居り、酒盛りの相手をしつつ思わずも日の暮れしかば、今宵はここに泊まるべしと云われるに否みかね、更たくるまでありけるに、たちまち浜野の方であって失火ありと聞こえしかば一犬はひどく驚いて、「早船一艘貸したまえ。徒(徒歩)より早く候わん」と云うに久影その意に任して送りの人をさえ付けて、船に乗らして返しけり。

かくて一犬が乗りたる船はひたすらに櫓を押しきって、浜野の浦へと漕ぐ程に、横鯛、下貝、琴樋らが▼乗りたる船に、端無くも近づくままに、一犬早く声を掛けて、

「ナウ、船人に物問わん。失火は浜野に候か」と問えば横鯛ら皆答えて、

「問われる如く浜野の坂根一犬の宿所に夜討ちに入って、焼き討ちをしたるなり」と云うに一犬驚き騒いで、

「さては早、我が家は敵の為に焼かれしか」と云うは

「まさしく一犬なりき」と喜び勇む横鯛、琴樋は早く鍵縄をうち掛けて、その船に乗り移りひとしく刃を引き抜いて、

「汝ら知らずや我々は太箱の刀自の為に恨みを返す同盟の勇婦誰かれなり。汝の家に夜討ちして家の内なる奴どもをば一人も漏らさず討ち取りしに、汝一人が居らざれば残り惜しさも限りもあらずと、先に一人の雑兵にて小蝶、太箱の両刀自より告げ来されしにより、我々はなお此の浦を立ち去らず汝が行方を尋ねしに、ここで会ひしは天の賜物、観念せよ」と罵って絡め捕らんとする程に、一犬は叶わじと思ひ定めつ、かい潜って、海へざんぶと飛び入ったり。その時水中に勇婦あり、一犬を引き捕らえ、さながら礫を打つ如く船の内へ投げ入れしを琴樋、横鯛が受け取って、押さえて縄を掛けにけり。今水中にあり、一犬を引き捕らえしは下貝なり。一犬が入水する事もやあらんと思ひしかば、早く船より海に入って水底に潜って居り、この故に一犬を容易く船へ投げ入れたる。その働きは名にし負う零丁鳥の号は虚しからずと諸人後に感じけり。その時一犬の送りに付けられたる飯山の下部、船人らは驚き恐れ腰うち抜かし、板子の上にへたばり伏して、許したまえと叫びしを琴樋、横鯛はあざ笑い、

「数にも足らぬ汝らを殺すとも何の益あらん。飯山に漕ぎ返して、久影に告げ知らせよ。賤の砦の勇婦らが太箱の為に恨みを返して事のここに及べるなり。刀自は元より逆心無し。さるを一犬のへつらいの讒言を受け入れて、賢女を害せんとせし返報は重ねて思ひ知らすべし。用心せよと伝えよかし」とあくまで脅し罵って、一犬をのみ引き立てて元の船に乗り移り、小蝶、太箱の後を慕って山谷村に帰り来にければ、太箱喜び云えば更なり勇婦らは小踊りして一犬にうち向かい、その罪を責めけるに、一犬は返す言葉も無く頭を垂れて居たりしかば、力寿は苛立ち進み出て罵り猛り斧をもて、一犬の首を刎てけり。

そもそもこの一犬は先に亀菊の為に桜戸を害せんと謀りたる陸船の兄なる事も、此の度抜糸が告げしによってその事定かに知られしかば、太箱は彼の首を賤の砦へもたらして、桜戸に見せんとて、酒に浸して下貝にしばらく預け置きにけり。

○その後、小蝶、太箱は横鯛、下貝、琴樋、末広、河堀、日熊、▼龍間、枸橘、千垣らをも賤の砦へ伴わんとて、その由を語らうを

「実に、此のままここにあれば討つ手の大軍が向かうべし。此の所を立ち去って三世姫に仕えん」と云う談合既に定まりしかば、各々家財を取り片付けて、木工六を始め眷属を皆こと如く引き連れ

つつ、小蝶、大箱らと諸共に近江路指して発ちいでけり。

○かくてその勇婦らは山谷村を発ちしより夜に宿り日に歩いて、木曾の馬籠山の辺まで来ける時に一手の軍馬が現れ出てたちまち道を遮りしを小蝶、大箱は遙かに見て、

「あれは此の辺りの山賊にこそあらんずらめ」と云う言葉も終わらぬ程に、力寿は二つの斧をうち振り、早戦わんと勇みしを下貝が急に押し留め、

「彼の軍兵にうち向かい来れる者は何人ぞ。名乗れ、聞かん」と呼び張れば、その手の大将と見えて二騎の女武者が馬より下りて進み近づき、

「これは此の年頃、馬籠山の砦にはべる花間田大鳥、浜真砂月二子と呼ばれる者なり。世に大賢女の聞こえある大箱の刀自は江鎮泊の勇婦たちの助けを得て、上総より此の所を過ぎりたまうと云う由を忍びの者が告げしかば、見参に入らん為に出迎えはべるのみ」と云うに大箱は進み寄り、月二子らに対面しつつ、まずその素性を尋ねれば兩人答えて、

「我々は木曾義仲の残党なりし何がしが娘なり。砦にはなお二人の女武者あり。そは養亀曳尾、月夜笛涼風と呼ばれる者なり。彼女らの親も木曾殿に縁ある者なりければ、先亡の余類を集めてその山に籠もり居りしが、親どもは皆世を去りたり。我々女なりと云えどもいずれも武芸を好むをもて、なおその砦を守って居り、願うは今より大箱の刀自、我が砦に留まって総大将になりたまえ。手勢三百余人あり。この儀を受け引きたまいな」と述べて矢を折り、誓いを為して、その真心を明かせしかば、大箱はこれを慰めて、

「各々ここに在らんより賤の砦へ赴いて、三世姫に仕えたまえ。さる時は名も正しく武勇を後に伝うべし。まず小蝶の刀自らにも対面をしたまえ」と云うに大鳥、月二子は一議に及ばず、その儀に任して小蝶らに名乗り合い、「しばらく砦に立ち寄って、長途の疲れを休らえたまえ」と懇ろに誘って先に立ちつつ導く程に、曳尾、涼風も雑兵の知らせによって山を下り、小蝶、大箱らを相伴って馬籠山の砦にて酒宴を設けてもてなしけり。

その時小蝶、大箱らは曳尾にも涼風にも賤の砦に赴いて、我々と諸共に三世姫に仕えたまえと言葉ひとしくすすめしかば、曳尾、涼風もその儀に従い、四五日、小蝶、大箱らの勇婦を皆砦に留めて、かたの如くに用意をしつつ遂に砦を焼き払い、手の者を相従えて小蝶、大箱らに伴われ賤の砦に来にければ、呉竹は蕃、桜戸、秦名、味鴨、朱西、白粉らと共に一里余り出迎えて、大箱、夏女のつつが無きを喜びつつ引いて衆議廳に相会して、凱陣の寿に酒宴を設け、横鯛、下貝、琴樋ら全て今参りの勇婦らに對面して互いに喜ぶ事は大方ならず。

その中に大箱、夏女は上総にて命危うかりし事の趣、又、小蝶らに救われたる体たらく、その後、坂根一犬を討ち取りたる由を物語って、一犬の首級を取り出し、これを桜戸に見せて、彼は陸船の兄なる由を告げにければ、桜戸はその儀を感じて心地良しとぞ讃えける。

○かくてその次の日に大箱を始めとして今参りの勇婦十九人は各々の衣装を改めて、三世姫の見参に入りしかば、姫上は大箱らを辺近くはべらせて、此の上ながら頼もしく思し召す由を仰せられて御教書をたまわりけり。

その時小蝶は大箱に第一の座を譲り、その身は次に居らんと云いしを大箱は従わず、

「我々は今参りにてさせる功績も無き者がいかでか御身の▼上に立つべき。強いてこの儀を宣え

ば辞し去るべし」と云うにより小蝶は遂に譲りかね、大箱を第二の席に居らせ、それより呉竹、著、桜戸、次第に席を定めけり。されば是より大箱、夏女、力寿、琴樋、横鯛、下貝、末広、河堀、日熊、龍間、枸橘、千垣、曳尾、大鳥、涼風、月二子、植梨、彫妙、抜糸ら十九人を相加え、古参の二十一人と合して四十名の勇婦らは各々がその役を定めて、水と陸との出丸を守り、あはれ京まれ鎌倉まれ討っ手の軍兵が押し寄せ来よ。華々しき合戦して手並みの程を見せずと云わぬ者なん無かりける。ここをもて賤の砦は光を増して武威輝いて勇氣凜々たりしかば、世の人なべて恐れけり。

○かくて大箱はある日小蝶、呉竹らに告げて云う様、

「私は人々の助けによって危うかりし命もつつが無く、かく安楽にはべれども、故郷の母親が私の故に絡め捕られる事しあればいかがわせん。いかで故郷へ赴いて、母と妹を伴って速やかに帰り来てん。この儀を許したまいね」とて旅の用意をしたりけり。是より後の物語りは下帙五の巻につぶさなり。作者曰く、事の多ほい☆を漏らさじとて、とやらこうやら書き取りました。これでしばらく中入り、中入り。

傾城水滸伝 第九編ノ三 曲亭馬琴著 歌川国安画

かくて大箱は小蝶らにうち向かって、故郷の宋公明村に忍び行き親と妹を迎え取らんと、ひたすらに語らいしを小蝶は聞きつつ押し止めて、

「宣う趣は道理なれども、御身が自ら故郷へ行きたまわんは極めて危うし。智勇備わりし人々を遣わして迎え取らせんとは思えども、しかるべき勇婦は上総よりの疲れあり。まだ休息の程もあらぬに難波へ行けとは云い難かり。今しばし待ちたまえ。人を選んで遣わすべし」と云うを大箱は聞きながら、

「なまじいに人を頼んで徒に日を過ごせば、親の安危をいかがわせん。もし不慮の事あれば後悔そこに絶ち難からん。所詮多人数にて行くなれば却って人目にかかるべく、災いも計り難かり。かかれれば私が只一人で忍び行く時は人目に立たず、もし又、災い在りとても親の為に果てる命はいささかも惜しからず。さあさあ放しやられんこそ、私の心は安かるべし。この儀に任せたまいね」とてしきりに逸って止まざりければ、小蝶は遂に留めかね、

「しからは心利きたる雑兵を十人ばかり遣わすべし。彼らを伴いたまえかし」と云うをも大箱は聞かずして、

「只今云いつる訳あれば供人は一人も要無し。今より発足すべけれ」とて早立いでんとしてけるを小蝶は再び押し止めて、

「春雨の刀自、聞きたまえ。親に災いあらんかとして、かく慌ただしき旅立ちの子たるの道ではべれども、▼三世姫の御為にその身を愛したまわすば忠義に欠ける所あり。百足の虫は死すれども、遂に倒れざるものは助け多きよってなり。一人行かんは甚だ危うし。供人多く具したまえ。これ災いを防ぐの用心。否お事か」と諫めしかば大箱はしばしうち案じ、

「宣う由は道理なれども、十人にては余りに多し。五人にては障りにならん。供は一人で事足る

べし」と尚も否んで果てし無ければ、呉竹すなわち計らって雑兵三人を付け遣わしけり。さる程に大箱は彼の三人の供人を従えて、その日門い出したりしかば、第三日の未の頃に早く難波に着きたれども昼は人目をはばかりあれば、林の内にその日を暮してやや黄昏になりしかば、すなわち三人の供人を元の所に残し置き、一人で宋公明村に赴きつつ親の家に近づいて背戸の方にうち巡り、折戸をほとほと打ち叩きしかば、園喜代が密かに立ち出て、大箱を見て驚きながら辺りを見返り声をひそめて、

「御身はなどて肝太くも故郷へ帰り来たまいたる。先上総にて在りし事は早くここへも聞こえしかば、当国の守天野の判官遠光殿は大箱の母と妹が逐電する事あるべしとて、趙九郎能得と云う家の子(家臣)に組子を多く差し添えて、この所を守らしたまい。鎌倉より御下知あれば絡め捕って参らすべしと、おごそかに命ぜられたり。されば私も母御さえ遠からず絡め捕られて、鎌倉へ引かるべし。これにより趙九郎は組子と共に奥に居り、さるをうかうか此の所へ来たまいしこそ不覚なれ。さあさあ影を隠したまえ」と囁き告げるをうち聞いたる大箱は驚き慌てて、更に一言の問答に暇もあらず、そのまま踵を巡らして足に任して走り去りしが、本街道を行くならば後より追われる事もあらん。小道を走るにます事あらじと思いにければ、遂に又、供人を残し置きたる元の林の辺に至らず、小道枝道嫌い無く辛うじて走る程に、たちまち後ろに人音して、「大箱を取り逃がすな」と云う声が遙かに聞こえしかば、驚きながら見返れば松明を振り照らして、彼の趙九郎能得が組子を多く引き連れて遠からず追い来るなり。

隠れる隈も無かりしかばいかにせましと心慌てて、と見れば道の方辺に古りたる社が在りければ大箱はその社に走り入りつつ辺りを見るに、ここさえ物陰も無ければ「尊神、今宵の災いを救わせたまえ」と祈念しつつ忙わしく戸帳を▼かかげて内陣に隠れて居り、程もあらせず趙九郎は組子と共に追い掛け来て社の辺に立ち止まり、

「まさしくここらへ追い詰めしと思うたる大箱が見えずなりしは不思議なり。そもそも此の所は還道村の内にして、左右は全て深田なれば横切り隠れる方は無し。もし此の社の内などへ影を隠せし事しもあらん。探して見よ」と下知しつつ、先に進んで松明を振り照らしつつあちこちと社殿を隈無く漁れども、ここにも大箱が見えざれば走りいでんとせし折に、一人の組子が呼び止めて、

「お頭、只今あの神戸帳が少し動いて候なり。もし戸帳の内などに隠れし事の無からずや」と云うに趙九郎は頷いて、「実にその鑑定極めて良し。いでいで」と云いながら戸帳を上げんとする程に松明の火がぱつと跳ね、眼の内に入りしかば趙九郎らは「あっ」とばかりに松明を投げ捨てて目を擦り涙をおし拭い、

「思うにここには居ざりけり。汝達の半ばは先へ走って早く出口を取り固めよ。我はそこらを尋ねて見ん」と云いつつ外の方に走りいでしがしばらくして又、帰り来て、

「かくまで漁りにしに影も得見えず行方も知れぬは返す返すも不思議なり。心に掛かるは戸帳の内のみ。なおよく内を検むべし」と云いつつ忙わしく立ち寄ってかき開けんとする程に、たちまち戸帳の内よりして、風さつと吹き出て松明を皆うち消しければ、趙九郎は驚いて、

「各々は何かと思う。我々凡夫の疑い深く社殿をしばしば踏み荒らし狼藉に及びしかば、只これ神が怒らせたまいて松明を消したまえるならん。皆諸共に出口に至って、明日の朝までつけて居らば袋の物を探るが如く捕り逃がす事あるべからず。皆々来よ」と云いかけて再び外の方へ出て行きけり。▼さる程に大箱は一度ならず二度までも、今や探しいだされなんとと思えば生きたる心地もせず、

しきりに神の冥助を祈って戸帳の内に在りけるに、先には彼の趙九郎が松明の火に眼を焼かれ、後には又、松明の火をうち消されしにより幸いにつつが無き事を得たりしかば、

「此は全く、この神の助けさせたまひしならん。いかなる神にましますぞ。真に不思議の靈験なりき」と思えば信心いやまして、なおそのままにありけるに、身さえ心気の疲れ果てて寝るとも知らずまどろみけるに、いと麗しき女の童が忽然と枕に立って、

「春雨の刀自、起きたまえ。御前様が待たせたまうに、さあさあ」と急がしけり。大箱は心ともなく誘なわれ行く程に、いときらきらしき砌の橋あり。橋よりしてあなたには宮殿、楼閣、薨を並べて、玉しくはには野草も木も或るいは花咲き実を結びたる異香薫じて得も云われず、梢に遊ぶ鳥の声、園に馴れたる獣まで皆世の中に無き者なれば深く心に怪しんで、

「我が故郷より遠くもあらぬここらにかかる宮殿の在りける由は伝えも聞かず、いかなる人の住処ぞや」と思い惑って行く程に、堆朱(彫漆)に塗り磨いたる大門、中門をうち過ぎて、奥深く伴われ、いと神々しき座敷に至って、と見れば上座なる御簾を掲げていと麗しき上臈が褥の上に座したまいたる。左右には十四五人の女の童がはべりたり。その時上臈は大箱をさし招き、

「やよ刀自、近くへ進みたまえ。今宵は不思議の事により親しく見え参らす、真に此上無き喜びなれ。刀自に盃をすすめよ」と仰せに女の童らは心得て、土器を持っていでつつ、すすめる酒を大箱は受け戴きて飲みけるに、香氣馥郁として味わい甘露に似たりけり。

その時上臈は又、宣う様、

「刀自は世に類い稀なる義烈の婦人なりけれども、宿世の果報が良からねば種々の艱苦に合いたまえり。さばれその業作るに及ばば忠臣義女の名をあげて後の世までに伝うべし。心映えを賞するの余りに今一卷きの天書を授けん。密かにこれを熟読せば助けになる事多かるべし。なおざりにな思いたまいそ」と懇ろに説き諭してその天書を授けつつ、更に四言四句の偈を唱えたまう様、

「門にあふて喜びあり、蔵六(亀の異名)※も凶ならず、東の方奥の又、奥、ここに功を現さん」この句を諳んじたまいね」とて再び三度吟じたまえば大箱既に覚えたり。▼

かくて上臈は又、宣う様、

「この世にては縁薄くて今宵限りの面会なれども、再会の日が無きにもあらず。今はしもこれまでなり。努めたまえ」と教え諭して身の暇をたまわりければ、大箱はうやうやしく喜びを述べ、別れを告げて、又、女の童に送られつつ、又、彼の御橋を渡る程に、女の童は指差し教えて、

「この川には黄金の如く光る蓑龜がはべるなり。あれ見たまえ」と云われしかば大箱は欄干に身を寄せかけて余念無くその龜を見る程に、女の童は後ろより大箱の足をすくってたちまちはたと突き落とせば、大箱は「あなや」と叫んで身を逆さに水中へ落ち入りにきと思ひしは、これうたた寝の夢にして身はなお戸帳の内に在り。醒めての後も胸うち騒いで、怪しき事限りもあらぬを夢かと思えば授けられたる天書の一巻きは懐にあり。且つ口中に酒の香りの残りたるもいと奇なり。

「此はこの社の御神の示現にこそ」と初めて悟って、既に明け行く空の隙にその神体を見奉れば霧中に見たる面影にちっとも違わぬ天女の像なり。ここに至って大箱はたちまち心に思う様、

「還道村の弁才天は巖島と同じ神にて、田心姫※の尊を奉ると伝え聞きしはまさにこれ、この社にてありけるなり。もし神明の庇護によって我が年頃の志を遂げる事あるならば、この御社を修復していかで今宵の神徳の返り報を申さめ」とて伏し拝み祈念して、立ちいづる時に仰ぎ見れば果たして鳥居に古りたる額あり。弁才天にてましましけり。

既にして夜は明けたるに、此の所に居るならば又、彼の追っ手の来る事あらん。道を求めて走らんとて遂に社を立ち離れ、行く事未だ幾ばくならず、たちまち追われて来る人あり。「許したまえ」と叫びしかば、ついで悪しとそのままに▼木に隠れかく垣間見るに、追われる者は追っ手の頭人、趙九郎能得なり。程もあらず一人の勇婦が斧をうち振り追っかけ来て、「陰囊無し※めが走るな」と罵りつつ追い詰めて、斧持て首を刎てけり。此の荒女は別人ならず旋風力寿なりければ、大箱は夢かとはばかり驚きつ喜んで、なおもしばらくためらう程に、味鴨、秦名、石竹、黄葉、枸橘らも又、趙九郎の数多の組子を追いかけ来て一人も残さず討ち留めけり。

※田心姫（たごりひめ）：日本神話に登場する神。※陰囊無し（ふぐりなし）：男らしくないこと。

その時六人の勇婦らは一つ所へうち寄って、
「敵は落ち無く討ちとめたれども、春雨の刀自の行方知れず。なお隈も無く尋ねべし」と云う言葉も終わらぬ程に大箱は木陰を立ち出て、
「なう、姉御たち。私はここにはべるかし」と云うに喜ぶ六人の勇婦らはそのつつが無きを寿いで、
「御身が旅立ちたまいし頃、多力の刀自は氣遣わしとて後より夏女を遣わしたまい。なお又、自ら十余人の勇婦を従え、夜を日に継いで道を急ぎ、今朝は此の繩手☆の出口まで来たまう程に、夏女殿の知らせによって御身の難儀に逢いたまいぬる事の趣が聞こえしかば、すなわち出口を守り居たる趙九郎らを討ち退け、尚も追い詰め討ち止めたり」とその趣を告げる折から、小蝶は花的、琴樋、末広、河堀、日熊、龍間、横鯛、下貝、植梨、彫妙、抜糸らを従えて押し続いて走り来て、皆大箱に対面してつつが無きをぞ祝しける。

その時小蝶は大箱にうち向かい、
「御身は私の諫めを聞かず自ら故郷へ赴きたまえば、災いあらん事を恐れて後より夏女を遣わしつ、私も又、押し続いて勇婦たちと諸共にこの地を指して急ぐ程に、果たして夏女の知らせによって御身が趙九郎らに追い詰められて危うき由が聞こえしかば、未だきに繩手へ押し掛けて、仇は落ち無く滅ぼしたり」と告げるに大箱深く感じて、
「親の難儀を思うばかりに御身の諫めを聞かざりしは今更後悔しはべるのみ。しかるに思い掛けも無く、必死の厄を救われし喜びに付けて、悲しきは母と妹の事なりかし」と云うを小蝶は聞きながら、

「その儀も心安かるべし。私は既に夏女、杣木、真弓、腐鶏、雌雉、白粉らに雑兵を多く差し添えて、宋公明村に赴いて御身の眷族を迎え取れとて遣わしたれば程も無く、具して此の所へ来つべきなり。又、御身が昨日、林の内へ残し置きたまいたる三人の供人にも会いしかば、彼らも夏女に従わして宋公明村へ遣わしたり」と告げるに喜ぶ大箱は事一つとして落ちも無き小蝶の計らいに感激して、皆諸共に繩手を退き、旅宿を求めて待つ程に、夏女、杣木ら六人の勇婦は大箱の母親と妹園喜代を伴って、従類家財残り無く具して旅宿に来にければ、大箱は感涙を拭いもあえず出迎えて母親を上座に押し上し、
「先に上総に在りし折、不慮の災いにより御身にまで御難儀を掛け奉りし不孝の罪を許させたまえ」と詫びつつ、又、園喜代にも「日頃の苦勞さもこそ」と云い慰めたる喜びに母の妙子も目を拭い、

「なう大箱、そなたが昨夜園喜代に会ってしばらく囁きしを彼の趙九郎が聞きつけて、組子を連れて追いかけたれば必ず絡め捕らるべしと思うのみにて詮術も無く微睡みもせず明かせしに、▼思い掛け無く江鎮泊の勇婦たちに迎え取られて親子姉妹がつつが無き対面を遂げる事は喜び言葉に尽くし難かり。刀自たちに此の喜びを申してたべ」と他事も無き言葉に大箱やや落ち居て、いよいよ親を慰めけり。かくて又、大箱は小蝶らと諸共に賤の砦に立ち帰り、母の為に座敷をしつらえ、朝な夕なに問い慰めて孝行を尽くしけり。

※蔵六（ぞうろく）〔頭・尾・四足の六つを隠すことから〕亀の異名。

○これよりの後、江鎮泊では勇婦らが各々の職分をよく守って三世姫に仕え奉り、或るいは雑兵に戦の駆け引きを教えなどして萬勇ましく日を送るに、京よりも鎌倉よりも討つ手の軍兵を向けられず、その故がいかになれば、年頃京と鎌倉の君臣の間は睦まじからず、なまじいに戦を起こせばこれより世の中乱れんかとして知れども知らぬ面持ちして捨て置かれると聞こえたり。さる程に指神子 著はある日小蝶と大箱らに告げて云う様、

「私が故郷には年老いたる母が一人居り、且つ我が師匠と頼みたる烏有仙女の安否をも久しく問いはべらねば、大和の睦田へ立ち帰り、遠からず帰り来つべし。しばしの暇をたまえかし」と云うを小蝶ら聞きながら、

「しからば人を遣わして母御を迎え取らすべし。ここにて豊かに養いたまえ」と云うに 著は頭を振って、

「我が母は住み慣れたる大和を離れる事を願わず。よしや迎えを遣わすとも決してこの地へ来るべからず。元よりちとの田畑がはべれば、老いを養うに乏しくもあらず。一度故郷へ立ち帰り、親と師匠に見えれば四五ヶ月の程に帰り来てん。まげて放ちやりたまえ」とて止まるべくもあざりければ、小蝶、大箱は止む事を得ず八景楼にて酒宴を催し多く 錢を贈りしかば、著は船にうち乗りつつ湖水を大津へ渡らんとて諸人に別れを告げて、その日門い出をしたりける。この日 著を見送りの席上に旋風力寿も在りしが、著が船にうち乗って大津の方へ行くを見て、さめざめと泣きにけり。

小蝶、大箱はいぶかってその故を尋ねれば、力寿は涙を押し拭い、

「人には各々二親あり。我のみ木の股より生まれんや」と云うを大箱笑いつつ、

「そなた故郷に親あれば人を遣わして迎え取らせん。それをうち泣く事かは」と云うに▼力寿は苛立って、

「御身は自ら故郷に至って、親を迎えて安楽に養いながらいかにぞや。私が故郷へ行かんと云うを留めたまうは情け無し。私の故郷は丹波にて篠山へ遠からず。しばらく身の暇をたまわれ。故郷には母一人あり。兄が養いはべれども貧しければ朝夕の煙りも細く立ち詫ぶべし。私は決して人を頼まず、一人丹波へ赴いて母を具して帰り来てん。この儀を許したまいね」と云うに大箱は頷いて、

「そは孝心の故なれば止めるにあらねども、そなたは酒を貪って、ややもすれば災いを引きいだす事が常にあり。第一には故郷に至るに帰り来るまで禁酒すべし。第二には常に使うニツの斧を持って行くべからず。第三には何事にも堪忍を旨として早く行って早く帰るべし。此の三ツの戒めを心にしめて良く守らば小蝶の刀自に談合してそなたを故郷へ遣わすべし」と云うに力寿は喜んで、

「^{のたま}宣^{おもむき}う趣^は心得^はべり。道^{どうちゆう}中^{にて}は酒^を飲^{まず}、斧^{おの}も決^{して}持^て行^くべからず。さあさあ放^ちやり^{たまえ}」とてしきりに逸^{はや}って止^まざりければ、大^{おほ}箱^ははしかじかと小^こ蝶^に告^げて、路^ろ用^{よう}の金^を乏^ししからず取^{らせ}にければ、力^{ちから}寿^ははちどの旅^り包^みと仕^つ込^み杖^を携^えて丹^{たん}波^ばを指^して旅^り立^ちけり。

その後大^{おほ}箱^はは力^{ちから}寿^はが漫^ろに道^{どうちゆう}中^{にて}災^{わざ}いを引^きい^だす事^もやあらんと危^{あや}ぶんで、誰^{たれ}をがな遣^{つか}わして助^{たす}けに為^なさんと語^らうに、朱^{あかにし}西^のの故^こ郷^も又^{また}、丹^{たん}波^ばにて彼^かの地^にに一人^{ひとり}の妹^{いもうと}あり。力^{ちから}寿^はとは同^{どう}国^{こく}の好^{よし}あれば、此^{こゝ}の日^ひ頃^{ころ}故^こ郷^の事^をを云^い出^して、わきて親^{まじ}しう交^あわりたり。これにより朱^{あかにし}西^も此^{こゝ}の度^{たび}故^こ郷^へ赴^{おもむ}いて一つには見^みえ隠^{かく}れに力^{ちから}寿^の後^{うし}ろ見^みを致^{いた}すべく、又^{また}一つには妹^{いもうと}にも対^{たい}面^{めん}せまく欲^ほしと云^いひしかば、大^{おほ}箱^はは斜^{しや}めならず喜^{よろこ}んで又^{また}々^{また}小^こ蝶^に由^{よし}を告^げて、朱^{あかにし}西^{にも}そこばくの路^ろ用^{よう}を与^{たま}へたりければ、朱^{あかにし}西^ははその次^{つぎ}の日^ひの朝^{あさ}未^まだき^に門^{かど}い出^してしきりに道^{みち}を急^{いそ}ぎけり。

○さる程^{ほど}に力^{ちから}寿^はは近^{おひ}江^のの中^{ちゆう}山^のより五^ご波^は坂^か峠^{とうげ}をうち越^こえて、朝^{あさ}に出^でては夕^{ゆふ}べに宿^{しゆく}り、既^{すで}に丹^{たん}波^ばの船^{ふね}井^いの郡^{ぐん}の藤^{ふじ}坂^かの里^{さと}まで来^きる折^せに巷^{ちやう}に掛^かけたる高^{たか}札^{ふだ}を人^{ひと}が集^あひて見^みたりしかば、心^{こゝろ}とも無^なく立^たち寄^よつてしばらく仰^{あお}ぎ見る程^{ほど}に、たちまち後^{うし}ろに人^{ひと}あつて力^{ちから}寿^の肩^{かた}を叩^{たた}くにぞ、驚^{おどろ}きながら見^み返^{かへ}れば思^{おも}ひ掛^かけ無^なき朱^{あかにし}西^{なり}。

その時^{とき}朱^{あかにし}西^はは力^{ちから}寿^を密^{ひそ}かに誘^{いそ}って人^{ひと}無^なき所^{ところ}に赴^{おもむ}きつつ、辺^{あた}りを見^み返^{かへ}り声^{こゑ}を潜^{ひそ}めて、
「和^わ女^{によう}郎^{らう}はあれを何^{なに}と見^みたる。今^{いま}京^{きやう}よりも鎌^{かま}倉^{くら}よりも国^{くに}々^々へ触^ふれ知^らして▼、大^{おほ}箱^を絡^かめ捕^とつて参^{まゐ}らする者^{もの}あれば七^{しち}千^{せん}貫^{くわん}文^{ぶん}の褒^{ほう}美^びを取^とらせん。夏^{なつ}女^めを捕^とらえたらんには五^ご千^{せん}貫^{くわん}、力^{ちから}寿^を絡^かめてい出^いせば三^{さん}千^{せん}貫^{くわん}たまわるとある。あの高^{たか}札^{ふだ}をうかうかと立^たち止^とま^つて見^みる事^{こと}か」と云^いわれて力^{ちから}寿^は頭^{こゝろ}を搔^かいて、

「知^しられる如^{ごと}く手^てを書^かかねば、さる事^{こと}なりとは知^らざりき。和^わ女^{によう}郎^{らう}は又^{また}、何^{なに}故^{ゆゑ}に一人^{ひとり}こゝらへ来^きたりしぞ」と問^とえば朱^{あかにし}西[、]

「然^さればとよ。大^{おほ}箱^の刀^た自^じがとにかくに和^わ女^{によう}郎^{らう}の事^{こと}を苦^くにしたまいて、私^{わらわ}を後^つより遣^{つか}わしたまえり。この地^ちには妹^{いもうと}が居^おれば、彼^か女^{によう}にも対^{たい}面^{めん}せん為^{ため}に和^わ女^{によう}郎^{らう}には一^{いち}日^{にち}遅^{おそ}れて賤^{しず}の砦^{とりで}を発^はちたれども、私^{わらわ}は返^{かへ}つて先^ま立^たつて、今^{いま}朝^{あさ}早^{はや}こゝへ着^ききたるなり。まづ此^こ方^{なた}へ」と先^まに立^たつて、妹^{いもうと}の宿^{しゆく}所^{しょ}へ伴^{とも}いけり。

かくて朱^{あかにし}西^は妹^{いもうと}を力^{ちから}寿^に引^ひき合^あわせ、

「彼^か女^{によう}は富^{とみ}崎^{さき}と呼ば^よばれたる。すなわち我^{われ}が妹^{いもうと}なり。男^{おとこ}魂^{たましい}ある者^{もの}なれば夫^{おつと}を持^もた^で女^{によう}所^{じゆ}帯^{たい}に生^{なり}業^{わざ}をしつるにより、人^{ひと}あだ名^なして朝^{あさ}笑^{えみ}子^す富^{とみ}崎^{さき}と云^いえり。しばらくこゝに休^{やす}らいたまえ」と云^いうに力^{ちから}寿^は喜^{よろこ}んで富^{とみ}崎^と名^な乗^りをしつつ、これかれと語^らう程^{ほど}に、富^{とみ}崎^は脊^{さか}をものして盃^{さかずき}をすすめけり。

その時^{とき}力^{ちから}寿^はは微^こ笑^えんで、

「私^{わらわ}は禁^い酒^{ちゆう}ではべれども今日^{けふ}は格^い別^{ちゆう}の事^{こと}なれば、一^{いち}碗^{わん}を傾^かけて、明日^{あした}より又^{また}、禁^い酒^{ちゆう}をすべし。始^はめたまえ」と急^{いそ}がして、差^さされつ差^さしつ余^{あま}念^{ねん}無^なく日^ひの暮^{くれ}れるまで飲^のみにけり。

されば力^{ちから}寿^の故^こ郷^はこの所^{ところ}より七^{しち}八^{はち}里^りあり。百^{もも}杖^{つえむら}村^{むら}と呼^よびなしたる片^{かた}山^{やま}里^{さと}なりけれども、昼^{ひる}は人^{ひと}目^めのはばかりあれば今^{いま}宵^よ夜^よすがら道^{みち}を走^まつて未^まだき^に故^こ郷^に至^{いた}るべしとて、仕^つ込^み杖^を突^つき立^たてて黄^た昏^{そがれ}頃^{ころ}より立^たちいでつ。足^{あし}に任^{まか}して行^いく程^{ほど}に早^{はや}明^あけ方^{かた}になりし頃^{ころ}、葉^は山^{やま}の麓^{ふもと}を過^よぎる程^{ほど}に、木^き立^た深^{ふか}き所^{ところ}より二^{ふた}つ^の斧^{おの}を携^たずさ^へ一人^{ひとり}の賊^{ぞく}婦^ふが立^たち出^でて、行^いく手^ての道^{みち}に立^たち塞^ふがり、

「やおれ、女^{によう}。命^{いのち}惜^{おし}しくば路^ろ用^{よう}も着^き物^{もの}も皆^{みな}渡^{わた}せ。我^{われ}を誰^{たれ}とか思^{おも}うらん。荒^あ女^{おんな}の名^なは隠^{かく}れなき旋^{つむ}風^{かぜ}力^{ちから}寿^{なり}。上^{かみ}総^{すべ}の配^{はい}所^{しょ}を逃^にれ出^でて、今^{いま}この山^{やま}を住^す処^かとす。さあ脱^{だつ}がずや」と罵^{のの}つたり。

カ寿はこれを聞きながら、

「事可笑しき盗人女め。旋風のカ寿は我なり。我が名を盗んで人を脅す、天罰思い知らせんず」と息巻き高くつと寄せて逃げんとするをかい掴み、だうと投げ伏せ、背を踏まえて、怒れる声を振り起こし、

「そもそも汝は何奴なれば、我が名を汚して追剥ぎをするや。ありつるままに白状せよ。さあ云わずや」と踏みにじれば、賊婦は息も絶え絶えなる苦しき声を振るわして、

「姉御前、許したまえかし。私は女に似気無く密かに御身の名を似せて、良からぬ業をしつる事は世にあるまじき事ながら、夫は先に身罷って家には老いたる一人の親あり。▼これさえ長き病にて足腰立たず臥しており、薬の代も朝夕に細き煙りの糧さえ尽いて、栓術の無きままに思い付いたる出来心、御身の勇名ここらまで隠れもあらず故郷も丹波の人と聞こえれば、肝太くかくいでたちて旅行く人を追い脅し、此上無き罪を作りたる。報いは的面、逃れる道無く、思わず御身にいで会って殺される身は惜しからねども、後に残れる母親の飢え死にをせん悲しさよ。もちろん私もその名は相似てカ路と呼ばればべれども、旋風でうあだ名はあらず、罪も報いも親の為、浮薄かりける身の果てや」と託言がましくかき口説く、声も涙に曇りけり。

カ寿はこれを聞きながら、

「実に哀れなる汝の白状。その身の為の悪事ならば許すべきものならねども、親の為にせしと云う罪悪も又、哀れむべし。今より心を改めて真の道にて親を養え。此の度はまず許すなり。此の後も懲りずまにかかる悪事を為すならば、その度は我決して許さじ。これに懲りよ」と戒めて、引き起こしつつ懐より五両の金を取り出して、「これにて親を養いね」とて紙に捻って取らせしかば、カ路は喜び受け頂いて、

「命助かるのみならず、数多の金をたまわりし御恩をいつの世にか報ぜん。あらかたじけ無し、有りがたや」と伏しつ拝み、ようやくに身を起こしつつ木隠れて※行方も知らずなりにけり。

※木隠る(こがくる):木の陰になって見えなくなる。

○かくてカ寿は此の山の麓路を西の方へ十町ばかり行く程に、既にして夜は明けにけり。物欲しくなりしかば、一つ家に立ち寄って、「飯あれば食せてたべ。値は望みに任すべし」と云うに主人とおぼしき男は竈を焚きつつと見かう見て、

「そはいと易き事ながら、炊き下ろさねば飯は無し。待たんとならば参らすべし」と云うにカ寿はうなずいて、

「昨夜夜すがら来にければ、さすがに疲れざるにあらず。しばらく一間を貸したまえ」と云うに主人は請け引いて、「しからば此方へ入りたまえ」とて破れ障子を引き開けて奥の一間に休らわせ、柴折り焚いて居たりける。

しばらくして外の方より足の音して帰り来る者あり。主人の男は声を潜めて、「昨夜は仕合わせ良かりしか」と問えばにこにこ微笑んで、

「然ればとよ、聞きたまえ。昨夜は思い掛け無くも真のカ寿にいで会って踏み殺されんとしたりしに、親を養う為のみなる出来心ぞと欺きたれば、真と受けつ哀れんで五両の金を取らせたり」と云うを主人は押し止めて、

「先に女旅人が朝飯を求めしかば、奥に休ませ置きたるなり。思うに彼奴はカ寿ならん。痺れ薬を

酒に加えて飲まして早く殺すべし」と肩身に潜めく談合を力寿は落ち無く漏れ聞いて、障子を蹴開き、つといでて、「盗人どもめ」と罵りながら仕込み杖を引き抜いて矢庭に力路を斬り倒せば、主人の男は驚き恐れて何地ともなく逃げ失せけり。▼

力路は既に唐竹割りに斬り倒されて死ににければ、力寿は囲炉裏の火を掛けて、この一つ家を焼き捨てつつ、百杖村を指して急ぐ程に、兄の宿所に着きにけり。

されば力寿の母親は年頃子故に泣き暮して両眼共に潰れしかば、力寿は辺へ身を寄せて、「ナウ、母御。力寿が帰りはべりたり」と云うに母親は喜んで、かい探りかい撫でて、「嬉しや力寿はつつがも無きか。そなたが上総へ流されたるその頃よりの憂き苦勞に、遂に此の目を泣き潰し、顔見る事もならずぞや」と云うに力寿も涙を拭いて、心の内に思う様、

「……我が母は律儀にて心直くなる人なれば、我が身が今江鎮泊に在りしと云えば忌み嫌い、伴われたまうまじけれ。賊すにしかじ」と思案をしつつ、さらぬ様に慰めて、

「母御よ、私は幸いに女武者に召し出され、今は都にはべるなり。よって御身を迎えん為にしばしの暇をたまわって参りはべり」と云いこしらえれば母は真と喜んで、

「それは目出度き事なりき。知られる如く貧しき兄に養われるは娑婆塞げ(ごくつぶし)※と思いつつ早く死にたかりしに、死なねばこそ又、かかる吉相を聞く喜びあり。いかでかは行かざらん。兄の帰るを待ちたまえかし」と他事なく答えをする折から兄の茶靡六が帰り来て、事の様子を立ち聞きけん。力寿をひどく罵りけり。

※娑婆塞げ(しゃばふさげ)：生きていても何の役にも立たないこと。ごくつぶし。

傾城水滸伝 第九編ノ四 曲亭馬琴著 歌川国安画

その時茶靡六は力寿に向かって、

「汝が如き荒女は広い世界に多くあらんや。先には此上無き罪を犯して、上総の果てへ流されし時、我も巻き添えの祟りによって、さらぬたに乏しい家の錢多く使いつつ、辛くして許されたる。その折の借錢の負い目は今に償い果てず、いと恨めしく思いたりしに、聞けば汝は上総にて謀反人と交わって、それが為に幾十人の人を殺し逐電し、江鎮泊の賊婦らの群に入つて、彼処に在り。それを今誰とて知らぬも無けれど、悪き子をこと更に可愛がられる親に告げて、物を思わせんは要無き業ぞと思ひ返して、云わでありしに、世をも人をもはばからず、立ち帰り来る肝の太さよ。今速やかに出て行けば、親に免じて見逃すべし。行かざらずは守へ訴えて、巻き添えの祟りを逃れん。▼さあ、いれずや」と息巻いて、思いのままに罵れども、力寿は常の氣質に似気も無く、頭を垂れ手をこまねいて、黙然としていたりしかば、茶靡六は云い甲斐無さに、罵り捨てつつ忙わしく、外の方指していでにけり。

その時力寿は思う様、

「……我が兄が今出て行きしは里人を語らって我儕を絡め捕らんとてなるべし。さあこの隙に親を背負って走り去るにます事あらじ。我が兄の邪険なる貧しき故に骨肉の情け無きまで三千貫の褒美を得ま欲するならば、要こそあれ」と思案をしつつ、腰巻きの長財布より金五十両を取り出

して、罐子(湯釜)の上に残し置き、母を慰めこしらえて、背負って背戸より足早に山路の方へ立ち退きけり。

○さる程に茶靡六は力寿を絡め捕らんとおぼえて、里の若者五六人を語らいつつ、伴いつ先に立て、手に手に棒を脇挟み、門口、背戸口両方に引き分かれつつ合図を定めて、前後ひとしく込み入りけるに、力寿は更なり母親も宿所には早居らずして、と見れば囲炉裏の罐子の蓋の上に小判四五十両が残し有りければ、茶靡六は早くそれを取り上げて、数えて見つつ思う様、

「……我が妹が此の金を残して親を誘い出せし、事の心を押し量るに、母御を迎えに来る者、彼女一人ではあるべからず。江鎮泊の荒女らが雑兵多く従えて、力寿を助けて諸共に来て居るにこそあらんずらめ。さるをなまじいに追い掛ければ、毛を吹き傷を求める、後悔そこに立つべからず。只穩便に見逃すにます事あらじ」と思案して、里人らにしかじかと囁き示めし押し止めて、「この事、沙汰無し、沙汰無し」と口を噤め、酒手として、ちとの金を分け与えしかば、里人らはその意を得て、各々家路に帰りけり。

さてもこの茶靡六は力寿の異腹の兄にして、父の先妻の子なりしかば、今の母は継母なり。家は極めて貧しかりしに心様は邪険にて、親不孝ある者ならねば、母は力寿を迎えに来るを幸いなりと喜んで、伴われて出て行きしを茶靡六は悔いもせず、五十両の金に望み足りけん。親の行方を妹に任して、後ろ安しと思ひけり。茶靡六の事、物語りこの下に無し。

さる程に力寿は追っ手から逃るべしと思ひにければ、道を違えて、山又、山に分け入る程に、既に日は暮れ、月差し上り、昼の如くに明かりければ、今宵も夜すがら道を走って、朱西の妹の宿所に落ち着かばやと思ひつつ、昨夜と今宵と二夜さまで、ちっとも眠らざりけれども、健やかなれば疲れを覚えず、母を背負って道無き道を辿れども物とも思わで、既に行く事遙かにして、明け方近くなるままに、母は喉が乾くとて、しきりに水を求めしかども、そこらに流れの無かりしかば、「今しばし、待ちたまえ」と▼慰めれども、母は只、「ひどく乾いて耐え難し。少しなりとも飲ませよ」と、しばしば云うに止む事を得ず。平らかなる石の上に母親を下ろし置き、あちこちと求め歩くに、なお水を得ざりしが、ようやくに谷に下って、わずかに清水を得たれども、汲み取る物の無かりしかば、仕込み杖を引き抜いて、鞘の内に水を貯え、元の所に立ち帰るに、母親は居らざりけり。

「此はそもいかに」とうち騒ぐ胸を鎮めて辺りを見るに、噛み切られたる片腕あって、西の方に血潮を引いたり。男勝りの荒女の猛き心もこの有様に弱り果てつつうち泣いて、

「アア悲しきかな我が母は狼に食われたまいしならん。こうあるべしと知るならば、背負って水を求めんに、降ろし置きたる油断は大敵。悔しき事をしてけり」と一人語ち、うち嘆いて、ひたすら涙にかき暮れしをさてあるべきにあらざれば、母の腕を懐にして刃を引き下げ血潮を葉に行く事一町余りにして、月を灯しに向かいを見れば、描ける虎によく似たる二つの獣が母親の軀を既に食い尽くし、口舐りをしてありければ、憤然として怒りに耐えず、「親の敵、逃さじ」と走り掛かって二つの獣をばらりずんと斬り伏せたり。その時力寿は眼を定めて、その獣をよく見るに、毛色は虎の如くにて、狼の子に似たる物なり、

「かかれればこの獣の親も我が母を食らえるならん。狩り出して殺し尽くさずば、山をばいでし」と血刀引き下げ、辺りを睨んで立ったる折から、一ト群繁き茅萱の陰より、同じ毛色の大獣が忽然と走り出て、力寿を目掛けて飛び掛かるをさ知つたりと引き外し、眉間をはたと打ちしかば、只一太刀

にて倒れけり。

程もあらず又一つ、同じ様なる大獣が後ろの方より走り来て、力寿に食らい付かんとせしを飛び上がり、やり過ぐして、項を丁と斬りしかば、獣は首を斬り裂けられて、そのままへたばり伏してけり。されば力寿は時の間に四つの悪獣を殺し尽くして、□□☆か恨みを清めしかば、なおよく止めを刺して、血刀を拭い納め、喰い裂き捨てられて残りたる母の着る物を拾い取り、その腕諸共に旅風呂敷に納め背負って、麓を指して下る程に、あちこちに集い居たる狩り人数多が力寿を見て、驚き怪しお事は大方ならず、つつがなく山を越えて来る事の由を尋ねしかば、力寿は事の趣をしかじかと告げ知らせるに、狩り人らは肝を潰して、

「そもや、女の身一つにて四つの山犬を殺せしとは真しからぬ事ぞかし。さてもその山犬は親子と四匹あり。色はさながら虎に似て、猛き事も虎に劣らず。およそ狼は皆灰毛にて斑は無けれど、山犬には斑ある事、地犬の如く一定ならず。虎毛の山犬も稀にはあるを知らざる者は虎なりと思ひ、知れる者もその皮を虎なりと欺いて、人に売る事もあるなり。そはそまれかくもあれ、件の四つの山犬はしばしば人を害する故に草山の里の長の小屋四郎と云う大尽が銭を出して我々を雇ひ、狩り取らせんとせらるれば、かくの如く夜な夜な出て、狩り取らんと欲すれども、▼我々の手に合わず。しかるを御身一人にて、討ち留めしと云われるは真しからぬ事なり」とて、皆疑わざる者も無ければ、力寿はすなわち、狩り人らを導いて、元の所に立ち帰り、彼の山犬を見せしかば、狩り人らは目舌を震わせ、感じ罵ること半時ばかり、

「これは人間技ならず、近き世の巴、板額なりとて、これにはいかでかますべきや。願うは我々諸共に草山の犬大尽許へ赴いて休息したまえ、さてもさても」とばかりに、且つ感じ且つ敬って、放ちもやらず山犬を残らずからげ、かき担い、力寿を先に押し立たし、小屋四郎の宿所に至って、事しかじかと告げしかば、小屋四郎の喜び云えば更なり、家の内の奴婢らまで、力寿の勇力に驚き感じて、もてなす事は大方ならず。

事遠近に聞こえしかば、四つの山犬とそれを討ち止めたる旅の荒女を見ばやとて、来る者市の如くなれば、力寿はそのまま辞しも去られずに、心とも無く押し止められて、しばらく逗留したりける。

さればこの所も同じ丹波の内なれども、力寿の兄の茶靡六が居る百杖村とは鉢賀、尾金が嶽、深嵩などと呼びなせし、三つの高嶺を隔てたる草山の里にして、力寿が山犬を殺せし所は鉢賀、尾金が嶽の間の嶮岨の深山にぞありける。さる程に先に力寿に討たれたる賊婦力路が夫は木こりにて、曾田介と呼ばれたる夫婦ひとしき悪者なり。しかるに曾田介は去ぬる日力寿に妻を討たれ、家をさへ焼き失われて、身を置く所無くなりけるに、草山の枝村の桑原の里人で総太兵衛と云う者は女房力路の親分なれば、桑原村に赴いて、妻の力路が世を去りたる由を告げ、悪事を隠してここに身を寄せてありけるが、彼の山犬を見ばやと思つて、草山に赴きつ、小屋四郎の宿所に至って、多かる人にうち混じり、囚らず力寿を見い出せしに、

「此の度四つの山犬を討ち止めたる荒女は彼女なりけり」と人皆云えば、驚きつ又、喜んで、総太兵衛の宿所に立ち帰り、主人に由を囁いて、

「此の度山犬を討ち留めたる旅の荒女は旋風の力寿なり。彼女は江鎮泊の謀反人らと一群れの者なれば、三千貫の褒美を懸けて、京鎌倉より尋ねたまふ罪人なるを草山の犬大尽は知らぬなるべし。しかのみならず、彼奴めは我が妻力路の敵なり。見逃し置くべき者にあらず、いざたまえ草山に赴

いて、小屋四郎殿に示し合わし、絡め捕る時は褒美は得易し。さあさあ」と急がすにぞ。総太兵衛も、この儀に任して、共に小屋四郎の宿所に赴き、

「ここに留め置かれたる彼の荒女は世に名だたる旋風の力寿なり。重き罪人なる者を留めて馳走したまえば同類の罪を逃れ難かるべし。絡め捕って国司へ引かずば、御身の上に及ぶべし」と云うに小屋四郎ら驚いて、

「さりとは知らず謀反人を留め置きしこそ悔しけれ。女なれども勇力あれば、漫ろには手を下し難けん。狩り人らにも心得させて、斯様斯様にたばからは過ちあらじ」と囁くを曾田介、総太兵衛は聞きながら、

「その謀り事は極めて▼妙なり。さあさあ計らいたまいね」と云うに小屋四郎は頷いて、密かに狩り人らに由を伝えて、謀り事を授けしかば、皆心得て用意をしつつ、酒肴をもたらし、小屋四郎の宿所に来つつ、容易く四つの山犬の害を除かれたる喜びなりとて、これを力寿にすすめしかば、力寿は彼らが謀り事をいかにして悟るべき、ひたすら感じ受け喜んで、大箱の戒めを忘れて、その樽を開かせ、狩り人らを相手にして、時移るまで飲む程に、相手は多勢で我が身は一つなれば、遂にはひどく盛り潰されて、泥の如くに酔いたりける。時分は良しと狩り人らは矢庭に力寿を突き倒し押さえて縄を掛けてけり。

思い掛け無き事なれば、力寿は驚き、且つ怒って、

「汝ら何の恨みがあって、理不尽にかく縛めたる」と問わせも果てず、小屋四郎は総太兵衛、曾田介らと諸共に立ち出て、

「云うな、云うな、謀反人めが。汝が上より尋ねたまう旋風力寿なる由は此の曾田介の訴人によって、我も人も定かに知れり。今は逃れぬ天の網、覚悟をせよ」と罵って、厳しく繋ぎ置きにけり。

○かくて小屋四郎は総太兵衛、曾田介らと談合して、力寿を引いて国司の館へ参らせんと議する程に、折も良く国司より八重機彩雲と云う女武者に雑兵を数多従わせ、村巡りの為にいだされければ、小屋四郎、総太兵衛らは彩雲の旅宿に至って事しかじかと訴えけり。これにより彩雲は小屋四郎の宿所に来て、組子に力寿を受け取らせ、「今日は日も早傾きたれば、明日城中へ引かん」とて、その夜は組子諸共に此の所に止宿して、厳しく力寿を守らせけり。

○さる程に朱西は妹富崎の宿所に在って、力寿が絡め捕られし由を伝え聞きつつ驚き憂いて、

「かかる事のあらん為に、大箱の刀自が遙々と我儕を遣わしたまいたるに、今もし彼女を救い得ずば、何の面目あって、おめおめと賤の砦に帰らるべき。いかにせまし」と談合するに富崎は頭を傾け、

「この事は力をもて争わん事叶うべからず。只智をもって謀るべし。幸いに彼の彩雲は私の武芸の師匠なり。斯様斯様にたばかって、痺れ薬を酒に入れ、肴にもこれを用い、途中においてこれをすすめ、彼の人々が毒に当たって倒れ臥す時、力寿殿の縛めの縄を解き捨てて、共に江鎮泊に走るべし。さらば私も此の所にあらん事は叶い難し。今日より密かに家財を片付け、馬に負わして小者を付けて、先へ遣わす時は後ろ安かり。▼この儀に従いたまわずや」と云うに朱西は喜んで、

「その謀り事極めて良し。さらば用意をしたまえ」とて、その計略に任せけり。

○かくてその次の日、富崎は朱西と共に多く酒肴をもたらし、道に出て待つ程に、既に真昼の頃に至って、彩雲は数多なる組子に力寿を引かせつつ、小屋四郎、総太兵衛、曾田介、狩り人らを従えて、城中を指して行く程に、富崎はその辺の茶店に在って出迎えて、

「先生、たまたま我が里近く来ませし由を聞きしかば、御盃をすすめんと申うて用意をしはべりに、罪人が御手に入りしにより早く帰らせたまうと聞いて宿所に迎え参らするに、暇無ければ御昼食をもたらしはべり。しばらくここに憩いたまいて、受けさせたまえば幸いならん」と懇ろに述べて、茶店に誘い、割籠、吸筒をこれかれと取り出して彩雲にすすめ、雑兵並びに小屋四郎、総太兵衛、曾田介、狩り人らにも落ち無く酒を飲ませけり。

力寿は富崎、朱西がここにて人々に酒をすすめるは我を救わん為なるべしと思えば知らぬ面持ちして、「我儕も腹が減りたるに、振る舞わずや」と呟くを朱西早くその意を得て、「この罪人めが何をか云う。汝に飲ませる酒は無し」と罵りつつ睨まえて、をさをさ彩雲らをもてなしけり。

さる程に彩雲は余所ならぬ富崎がもたらした酒肴を否と云わんはさすがにて、盃を上げたれども下戸なりければ多くは飲まず、雑兵らは引き受け引き受け酒を飲み飯を食らって、箸を置かんとする程に、皆々身の内萎え痺れ、涎を流し、眼を見張って、将棋倒しに倒れけり。彩雲はこの有様に驚き怒って立たんとせしが、その身もたちまち萎え痺れ、うつ伏しになって動き得ず。その中に小屋四郎、総太兵衛、曾田介の三人は未だ酒を飲まざりければ、富崎らの謀り事に「当てられたり」と思うにぞ、驚き騒いで悶着したるを「得たり」と力寿は立ち上がる勇婦の勢い縛めの縄はたちまちふっと千切れて進退自由になりしかば、雑兵の方辺に置きたる仕込み杖をかい取り早く、うろたえ騒ぐ曾田介をばらりずんと斬り倒せば、小屋四郎、総太兵衛はアツとばかりに驚き叫んで外の方指して逃げ走るを力寿はすかさず追っかけて、又、小屋四郎を斬り伏せけり。

その隙に総太兵衛は一反余り▼逃げ延びしを向かうに立ちたる朱西が用意の懐剣引き抜いて、唐竹割りにぞ斬り倒す。さればこの余の雑兵も毒酒を多く飲まざりしは力寿が為に斬り倒され、逃れる者は無かりけり。かくても力寿はなお飽かず、又、血刀を振り上げて、倒れ伏したる彩雲の頭を刎んと立ち寄るを富崎が急に押し止めて、

「やよ待ちたまえ、云う事あり。此の彩雲の刀自は私の師にて、武芸は更なり心様も世の常なる婦人にあらず。しかるを痺れ薬にて、かくの如くに謀りしは御身を救わん為にして、止お事を得ざるの業なり。さるを又、斬り殺せば、誰か不仁と云わざるべき。当の敵の曾田介、小屋四郎、総太兵衛を討ち留めたれば、恨みはあらじ。やよ捨て置いて走りたまえ」と言葉せわしく諫めしかば、力寿は引き下げし刃と共に怒りを納め、頷いて、

「云われる趣は道理なり。毒に当たって倒れし者を殺せば世の勇婦に笑われん。しばらくここを退いて、彼女の酔いが醒めるを待たん。彼女が毒酒の酔い醒めても追い来ざりせば、さて止むべし。もし追い来たらば、その折に勝負を決するとも遅きにあらず。いざ行くべし」とうち連れ立って、三人は静かに出て行きしをこの時茶店の者どもは恐れて早逃げ失せて、一人もここに居らざりければ、止める者は無かけり。

○かくて力寿は朱西と富崎に伴なわれて一里余り退きつ、道のべの石に尻うち掛けて、しばらく憩い居る程に、八重機彩雲は多く酒を飲まざりければ、忽然と我に返って、刀を引き下げて追い掛けて来て、遙かに声を振り立てて、

「賊婦ら、何処へ走るぞや。我過ちて汝らの謀り事にあてられて、先には不覚を取ると云えども、ここで会いしは天の導き、頭を並べて刃を受けよ」と罵り走り掛かるを力寿は早く立ち向かい戦わんとしけるを富崎は間に分け入って、双方を押し留め、うやうやしく彩雲にうち向かいつつ、言葉を正して、

「八重機の刀自、怒りを鎮めて、私が云う事を聞きたまえ。近き頃は京鎌倉の政治が直からねば、忠信は遠ざけられ、佞人(よこしまな人)は時を得たり。この故に▼女なりとも男魂ある者は亀菊と義時を討ち滅ぼして、順逆の天理を正しくせま欲しく思う者多くあり。これにより小蝶、大箱の両賢女、数多の勇婦諸共に三世姫を守りかしづいて、賤の砦に籠もれるなり。かかれればこの力寿の刀自も私の姉の朱西も皆彼の砦の大將なり。これを賊婦と云うべからず。力寿は母を迎えん為に、故郷の兄許へ行き、朱西は又、大箱の指図によって、力寿の後ろ見をせん為に後を慕い、この地に来て、私の宿所に逗留せり。

しかるに力寿は悪者の曾田介らが為に謀られて、遂に虜になりしかば、救い取らん為にのみ、御身に良からぬ酒を盛り、事のここに及べるはこれ止む事を得ざるの業にて、元より恨みあるにはあらず。願うは志を改めて、我々と諸共に賤の砦に赴いて、三世姫に仕えたまえ。さる時は忠臣義女の香ばしき名を残さん事、勇婦の本意にはべらずや。かく道理を尽くしても思い返したまわさば、まず早私の頭を刎て、御身の罪を購いたまえ。元これ義による事ながら、師を欺いたる罪は私にあり。今更命を惜しまんや。いずれの道にも賢慮に任せん。思案を定めたまいね」と言葉を尽くして諫めしかば、彩雲はほとほと感激して、

「云われる趣は道理なり。この身の落ち度を購うとも、義烈の勇婦を討ち取れば心ある人は笑うべし。さればとて、おめおめと城中へは帰り難かり。我が二親は世を去って、未だ夫が在らざればとてもかくても身一つなり。小蝶、大箱両刀自に用いられる事あれば、共に近江へ赴くべし」と答えて和睦をしたりしかば、富崎の喜び云えば更なり。力寿、朱西も喜びに堪えず、義を結び、向後を契って早く当国を発ち離れんとて、四人はうち連れだちて行く程に、富崎の家財を馬に負わして、先にいでたる小者らは五六里あなたに待ちて居り、これより皆々一つになって、近江路指して急ぎけり。

さる程に小蝶、大箱は力寿が過ちあらんかとて、重ねて雌雉、涼風に雑兵を数多付けて、迎える為に遣わしければ、力寿、朱西、彩雲、富崎らは道にてこれと相会って、皆諸共に帰り来て、事しかじかと告げにければ、小蝶、大箱は呉竹、桜戸らと共に忠義堂に相集い、朱西らをねぎらいつつ、力寿をもはべらせて、彩雲、富崎に対面し、三世姫に帰依の喜びを述べ、誓いの盃をすすめ、その後姫上の見参に入れ奉って、一方を守らせけり。

されば力寿は丹波にて有りつる事をしかじかと大箱、小蝶らに告げ知らし、彼の山犬に食れたる母の片腕を見せしかば、大箱、小蝶は驚き嘆じて、老女の薄命をうち嘆き、力寿がその夜▼所も去らず、四つの猛獣を殺して親の為に恨みを返せし、その勇余りありと讃え、或るいは又、偽力寿の事、曾田介の事、朱西姉妹がよく力寿を救うたるその折の富崎の計略智辯の由を聞きつつ、彼女を誉め、これを感じて、果ては笑いを催しけり。

かくて又、大箱は力寿が母の片腕を砦の寺に葬らして、七七(四十九日)の仏事を執り行わせ、その石碑を建て、呉竹に碑銘を作らし、植梨にこれを書かして、事落ちも無く物せしかば、力寿は

ひたすら恩義を感じて母の中陰過ぎるまで、精進しつつ位牌に向かって、朝夕回向したりしを人せめてもの事に覚えて、いよいよ大箱の徳を感じけり。

かくて今年は儂く暮れて、次の年の春に至っても蕃が帰り来ざりしかば、小蝶、大箱は談合して、指神子は去ぬる頃、四五ヶ月の間には必ず帰らんと云いつるに、今に訪れ無きは心得難し。夏女は日毎に八十里を行く仙術あれば、彼女を迎えに遣わさんとて、夏女に事の由を告げ、大和へぞ遣わしける。

さる程に夏女は彼の四つの甲馬を腿に繋ぎ、砦を発って次の日は早大和の鳥捕山の此方まで来にける折、たちまち後ろに人あって、

「女韋駄天夏女の刀自、しばし待ちたまえ」と呼び掛けるを夏女は急に見返りしに、見も知らぬ女なりければ深く心にいぶかって、

「そもそも御身は何処の人ぞ。私を知って呼び止められしは故こそあらめ。いかにぞや」と問われて、「さこそ」とその女は辺に近付き跪き、

「いぶかりたまうは道理なり。▼私も見知れるにはあらねども、今江鎮泊にその名聞こえし女韋駄天夏女の刀自は四つの甲馬を腿に繋いで、日に八十里を行く術ありと世の風聞に伝え聞きしに、只今御身の走りたまうその速やかなる事は人の及ぶべきにあらず。これ必ず夏女の刀自にてあるべしと思いつつも呼び掛けしに、違わざりける喜ばしきよ。私が事は呉藍山桃と呼ばれて、祖父は土佐の冠者の希義主に仕えたりしが、希義が討たれたまいし折に共に討ち死にをしはべりき。父は生涯浪人なりしが父母共に身罷りぬ。私も父祖の武芸を伝えて男魂無きにあらねば、江鎮泊に赴いて三世姫に仕えんと思う事久しけれども、縁無ければ未だ果たさず。私には一人の友達あり。そは水馴竿沖津と云えり。相別れしより、いかになりけん行方も知らずはべりしに、近頃、此の大和路に在りとのみ、ほのかに聞こえて未だその住処を知らず。尋ね詫びつつ故郷へ立ち帰らんとする折、御身に会いしは幸いなるかな。願うは江鎮泊へ伴って、我が宿望を遂げさせたまえ」と云うに夏女は頷いて、

「その儀、私は心得たり。さばれしかじかの事により、小蝶、大箱の指図にて当国の睦田へ赴いて指神子を迎うべき要用あれば、彼処に至って帰路に御身を手引きせん。御身も私と諸共に睦田へ赴きたまわずや」と云われて山桃は一議に及ばず、

「そは喜ばしき事にはべり。さりながら私は御身の早走りに続いて行く事は叶い難し」と否めば夏女は微笑んで、

「その儀も心安かるべし。四つの甲馬を二つに分かちて、御身の腿に繋ぐ時は劣らず勝ず早く行くべし。良き道連れを得たり」とて、うち連れ立ちつつ行く程に、向かいより一手の兵が忽然と現れいでしを夏女、山桃はちっとも恐れず、共に進んで近づく程にその手の大将と覚しきはすなわち二人の勇婦にて辺りをはらって来にけるが、一人の勇婦が声を掛け、

「そは山桃の刀自ならずや」と呼ばれて山桃がつつら見るに、この勇婦は別人ならず、先に別れし一人の友達、水馴竿沖津なりければ、「此はそもいかに」とばかりに喜びつつ進み寄って、やがて夏女を引き合らし、互いにつつが無きを祝しけり。

その時沖津は山桃に向かって、

「私は近頃、鳥賊幟飛子、女貞木袖垣と云う二人の勇婦と共に鳥捕山の砦に在り。飛子はすなわち此の刀自なり。我が身の上も此の人々と共に砦にある由も事一朝には尽くし難かり。今日は麓

の川狩りに今朝より出たる帰路なり。夏女の刀自も諸共にいざ砦へ赴いて、袖垣にも対面したまえ。さあ、此方へと▼先に立つ飛子も親しく語らって山の砦へ誘いければ、袖垣も出迎えて、夏女、山桃に対面しつ、時を移さず酒宴を設けて懇ろにもてなしけり。

沖津、袖垣、飛子らが来歴は十編の初めに記すべし。第十編も続いて出板。今年も変わらず評判を鳥が鳴く、東の名物他に類無き兵物語り。くどくても見飽かぬ所を御小感、御小感。目出度し、目出度し。

<翻刻、校訂、翻訳：滝本慶三 禁転載 底本／早稲田大学図書館所蔵資料>